

SM1004墳丘断ち割り状況



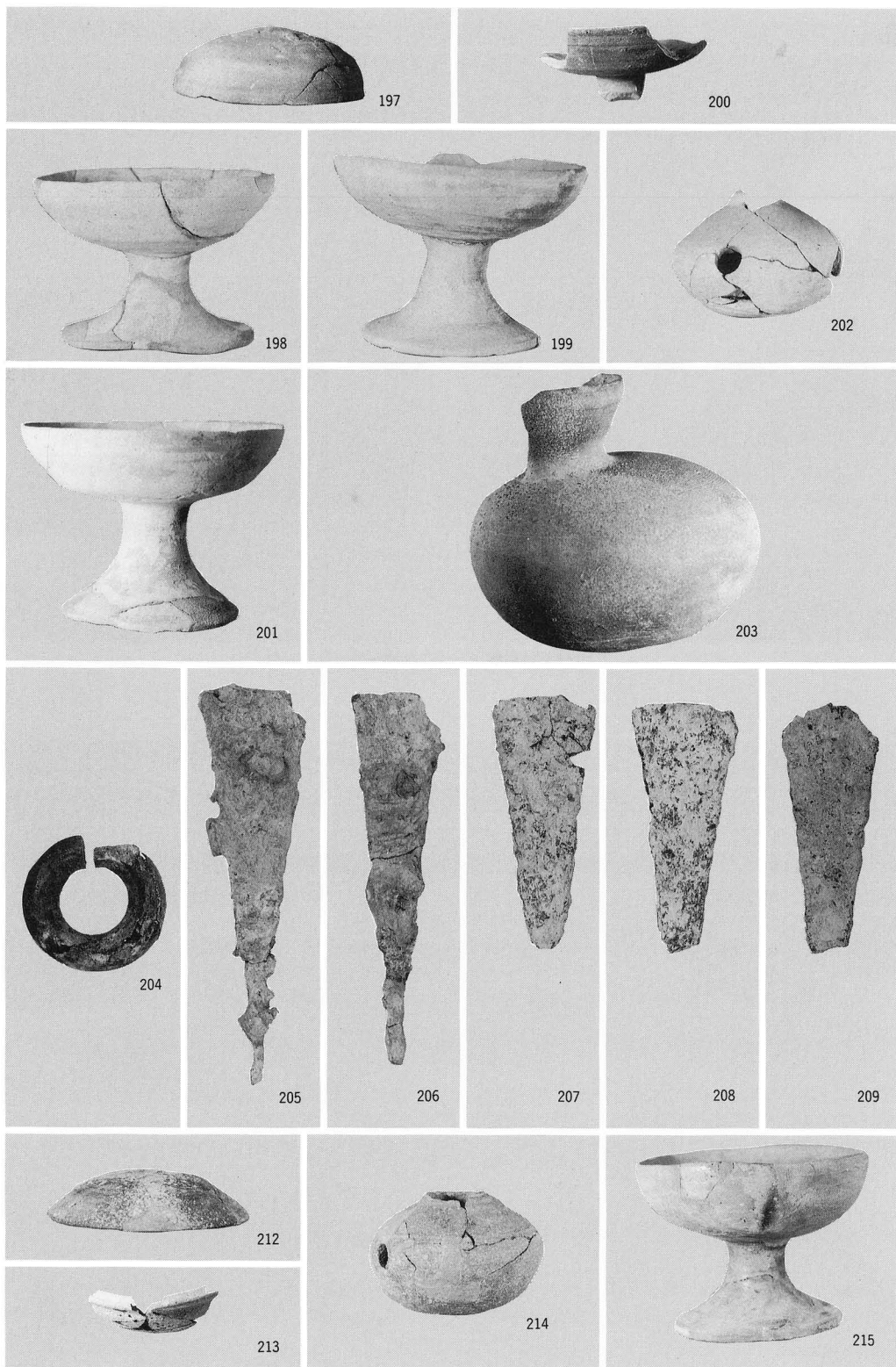
SM1004墳丘断ち割り状況（南側）



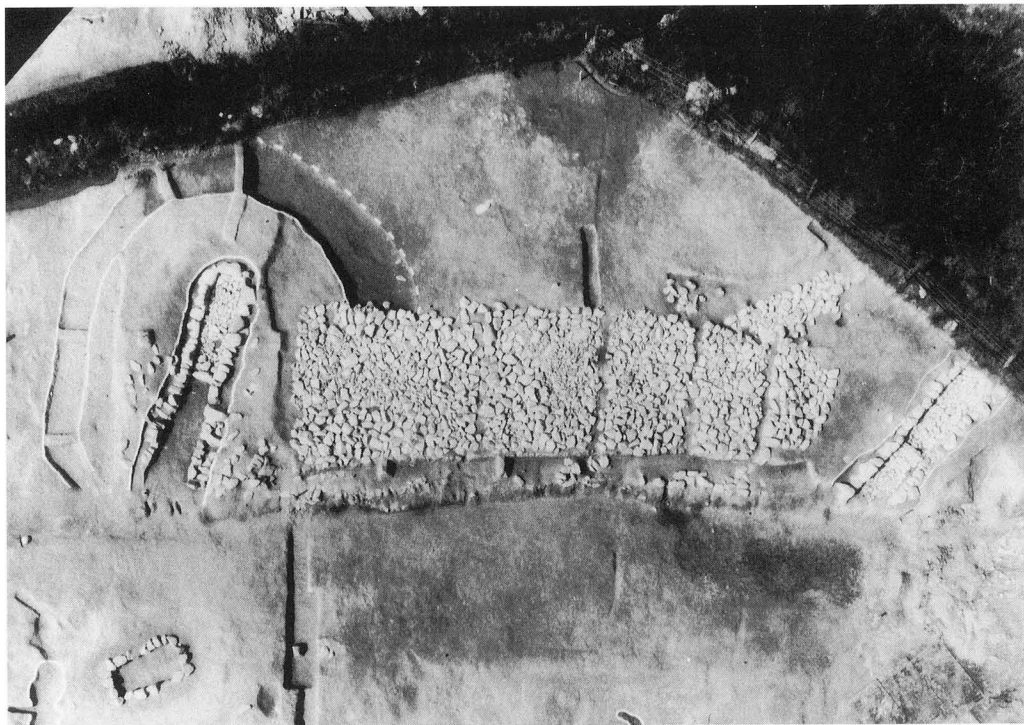
SM1004横穴式石室構築状況



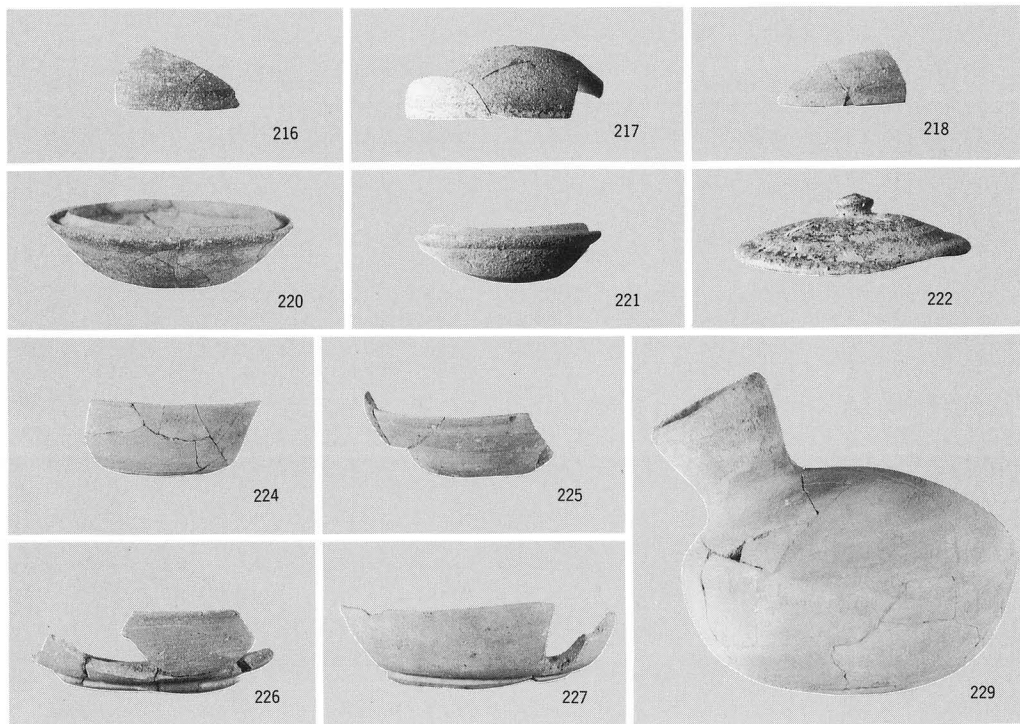
SM1004横穴式石室構築状況（奥壁部）



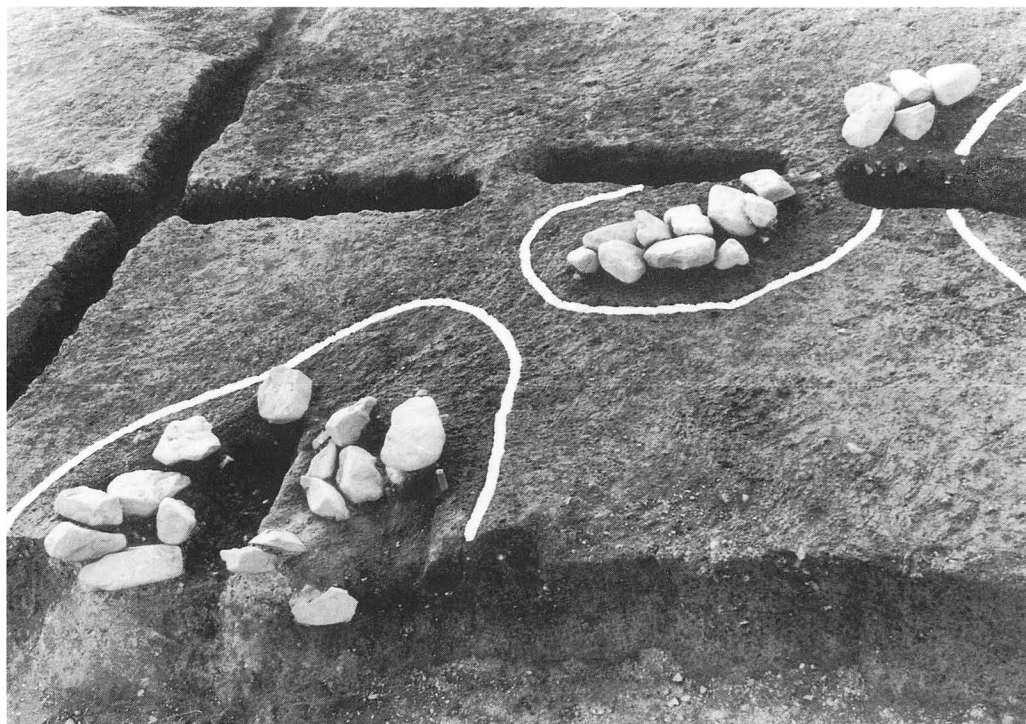
SM1004出土遺物



石敷状遺構全景



石敷状遺構出土遺物



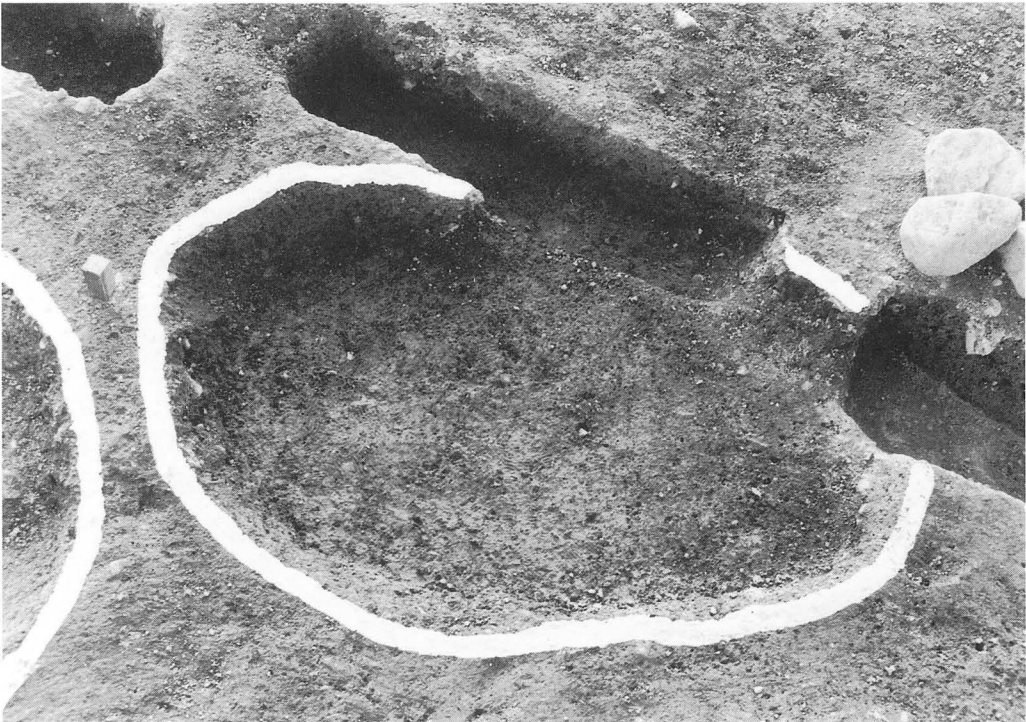
ST1001・2検出状況



ST1001完掘状況



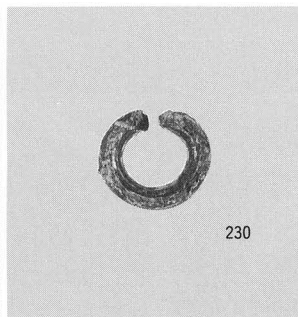
ST1001遺物出土状況



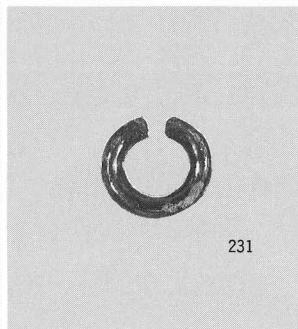
ST1002完掘状況



SM1005全景



230



231

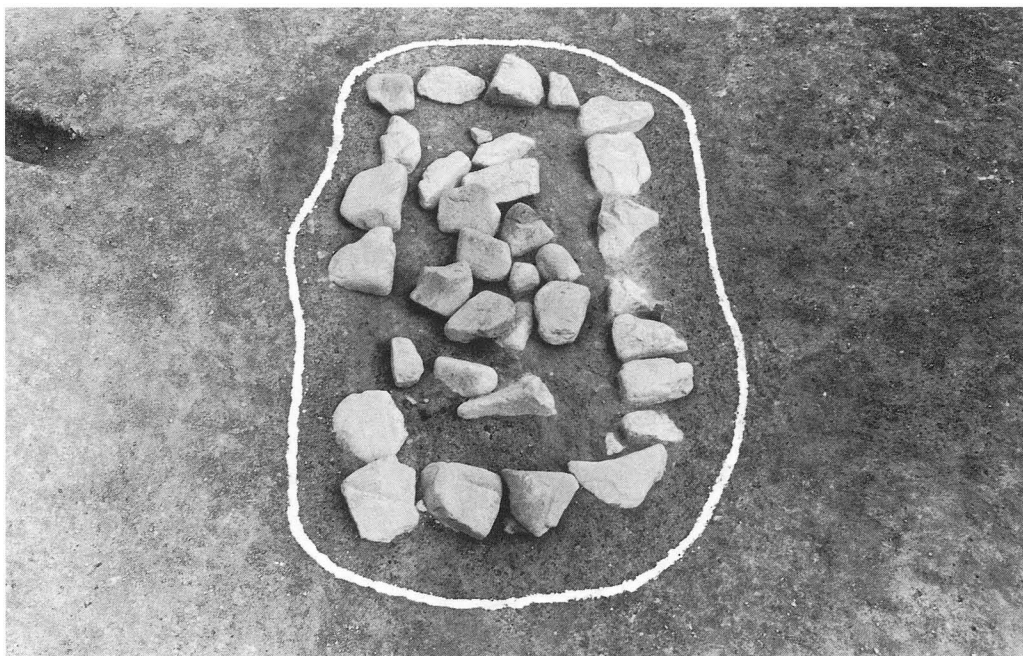
SM1005耳環出土狀況・出土耳環



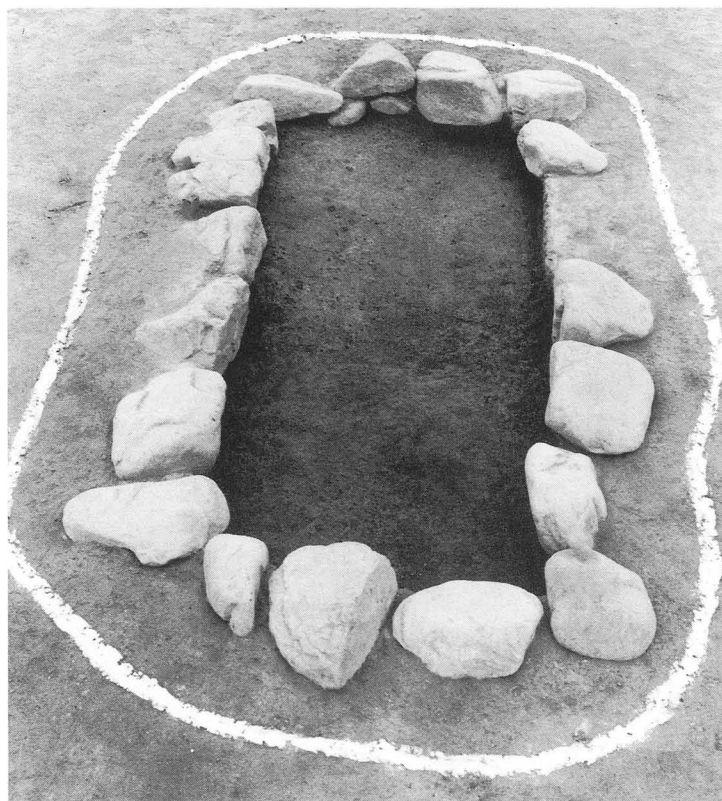
SM1006横穴式石室



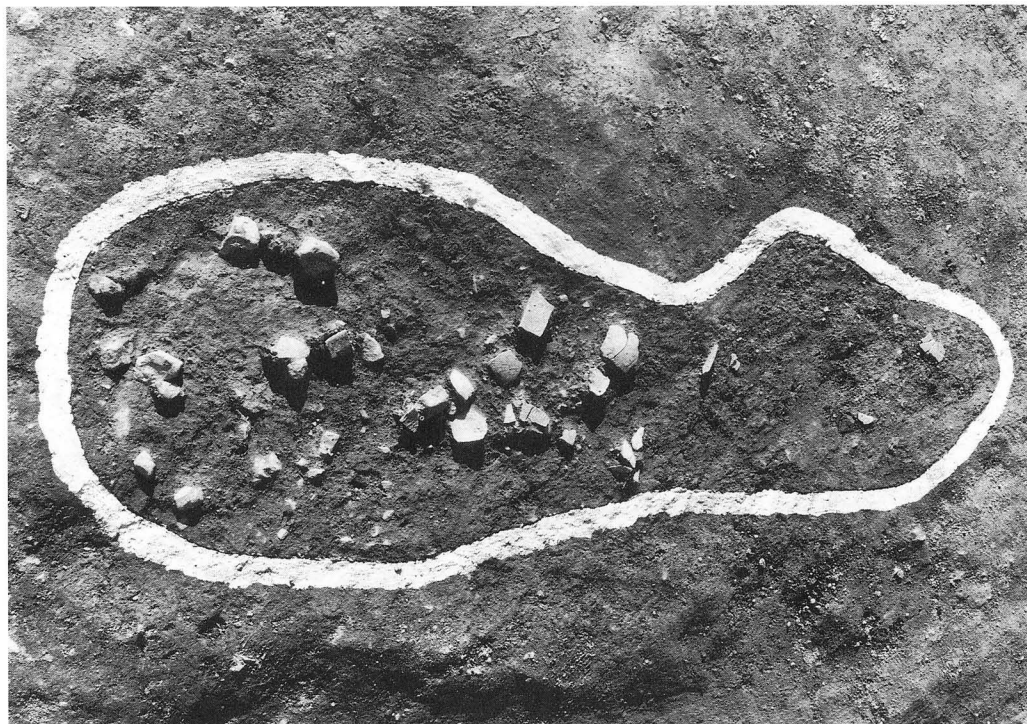
SM1006横穴式石室掘り方断ち割り状況



ST1004検出状況



ST1004全景



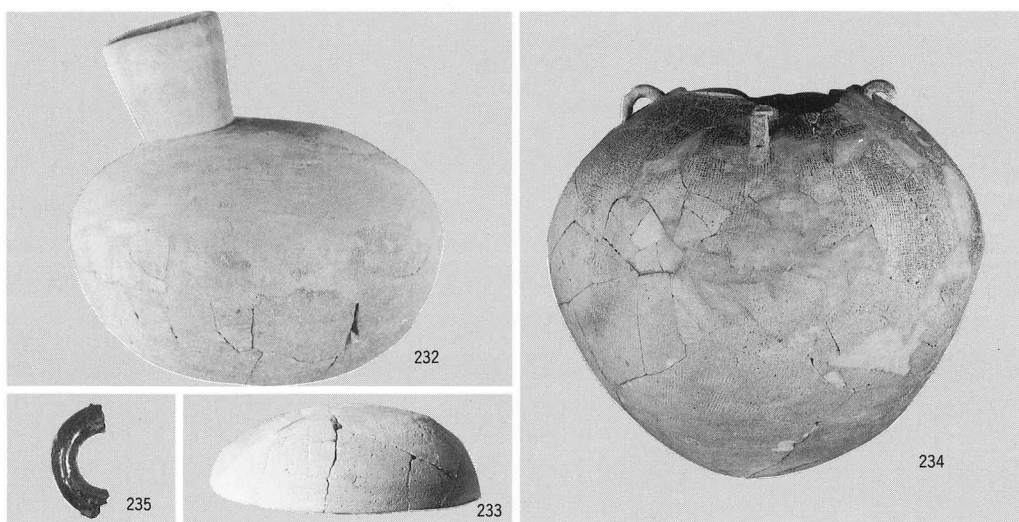
SK1001遺物出土状況



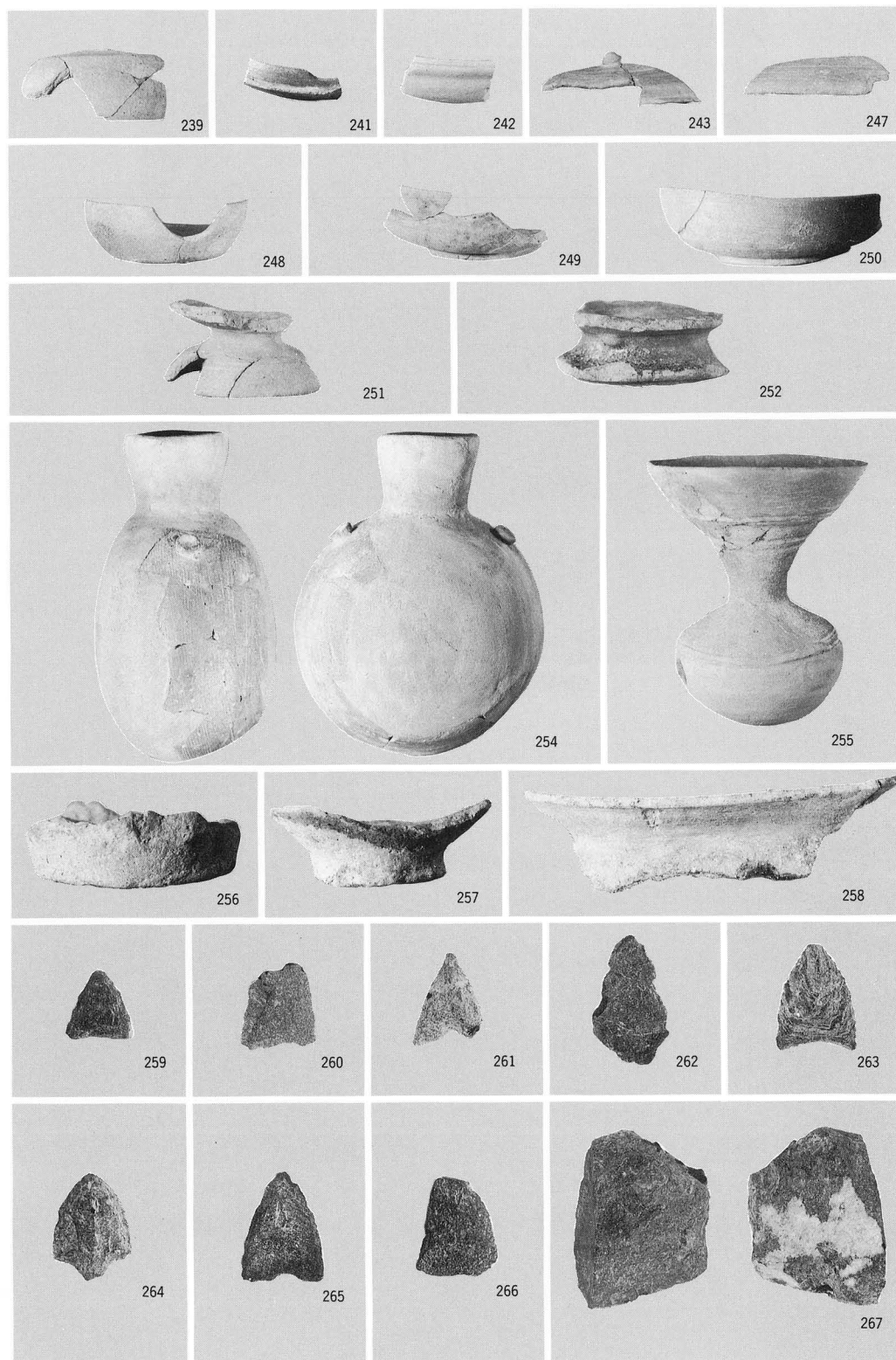
SK1002遺物出土状況



SK1002完掘状况



SK1001・2出土遺物



第10・第11調査区出土遺物



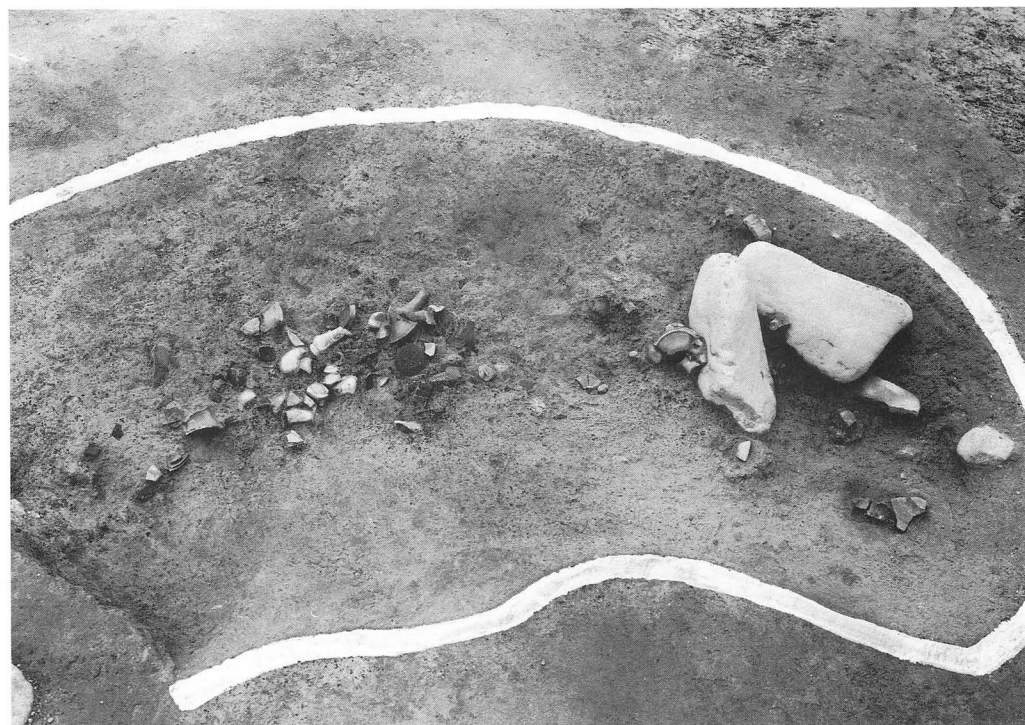
SM1007第二次床面検出状況



SM1007第二次床面検出状況



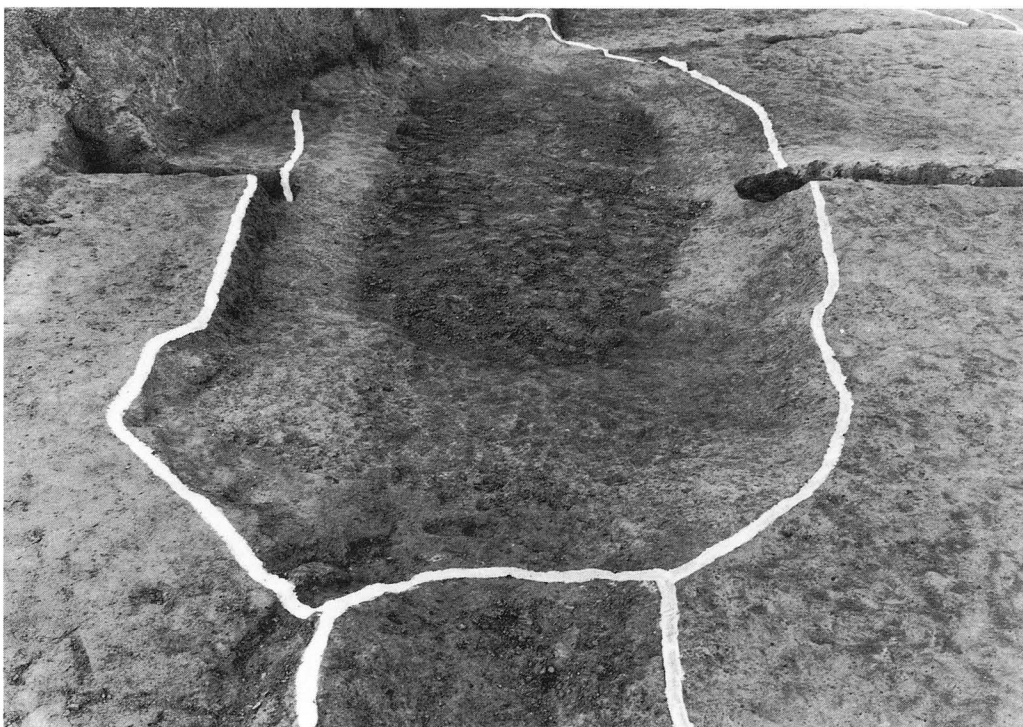
SM1007第一次床面検出状況



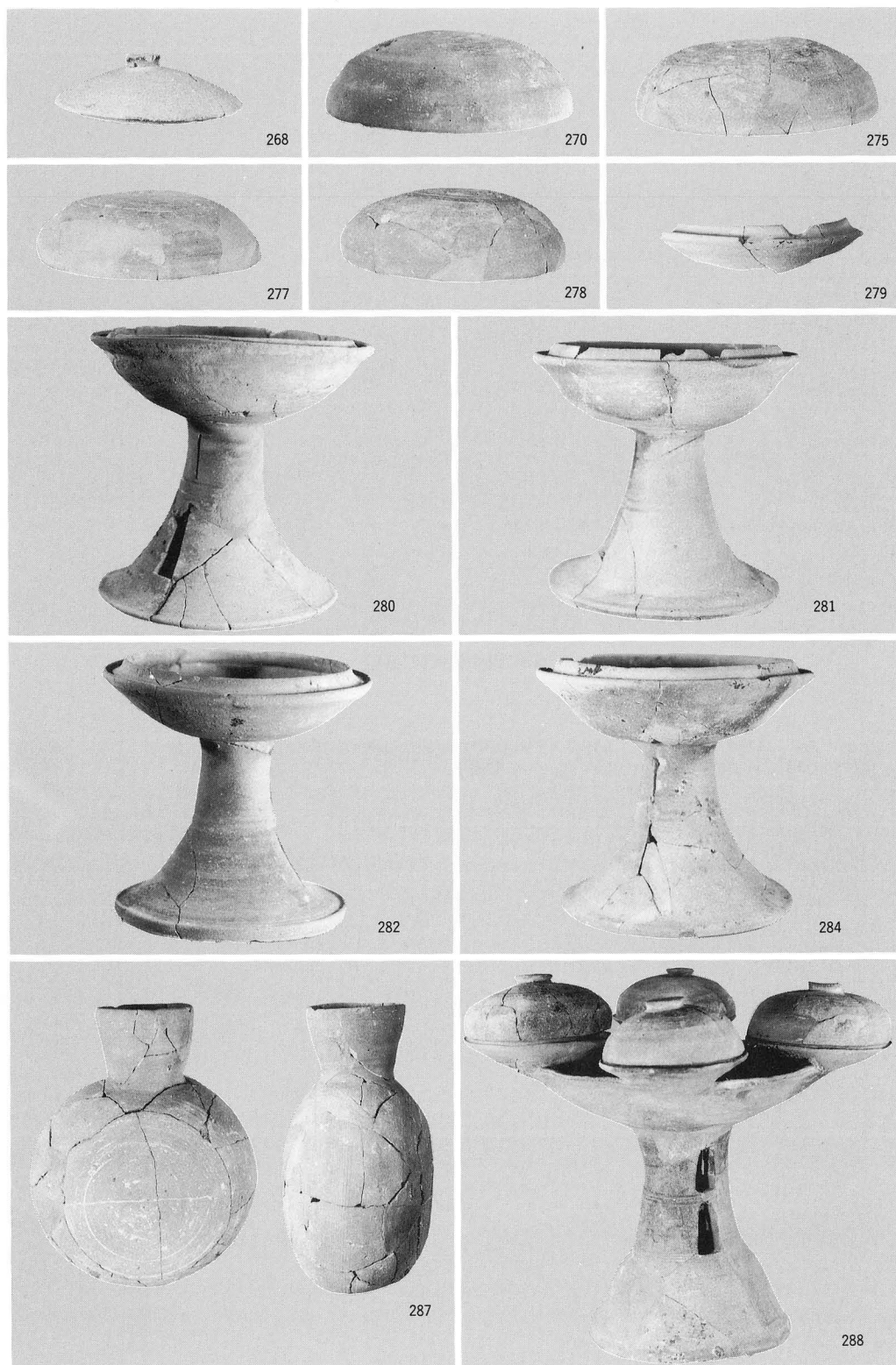
SM1007横穴式石室前庭部遺物出土状況



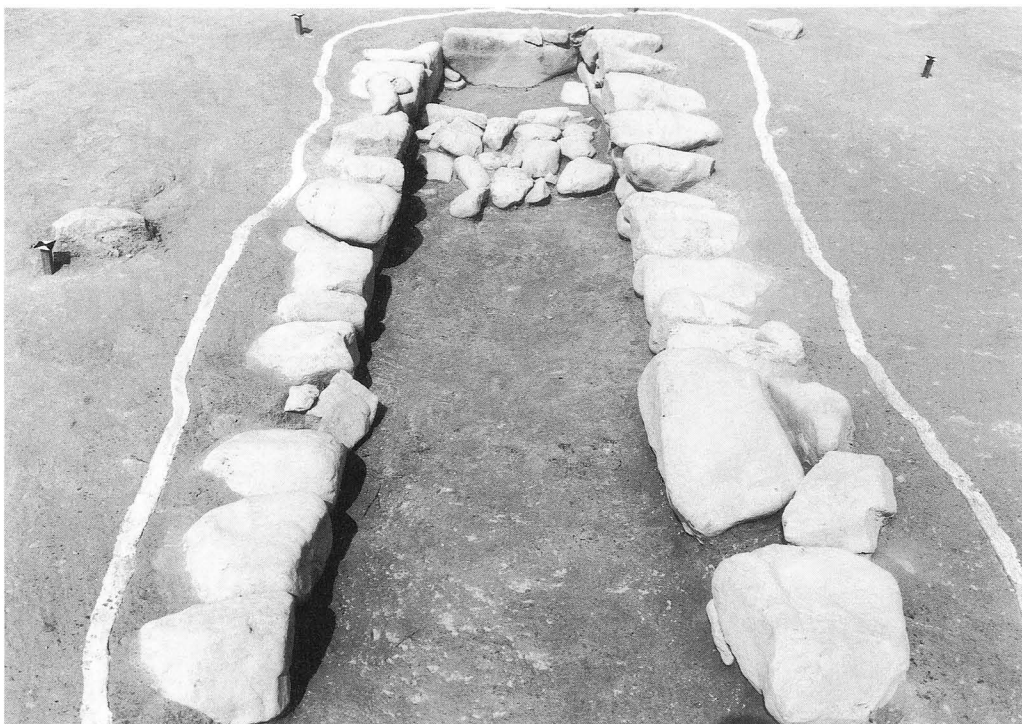
SM1007横穴式石室構築状況



SM1007横穴式石室掘り方完掘状況



SM1007出土遺物



SM1008横穴式石室



SM1008横穴式石室前庭部遺物出土状況



SM1008床面集石状況



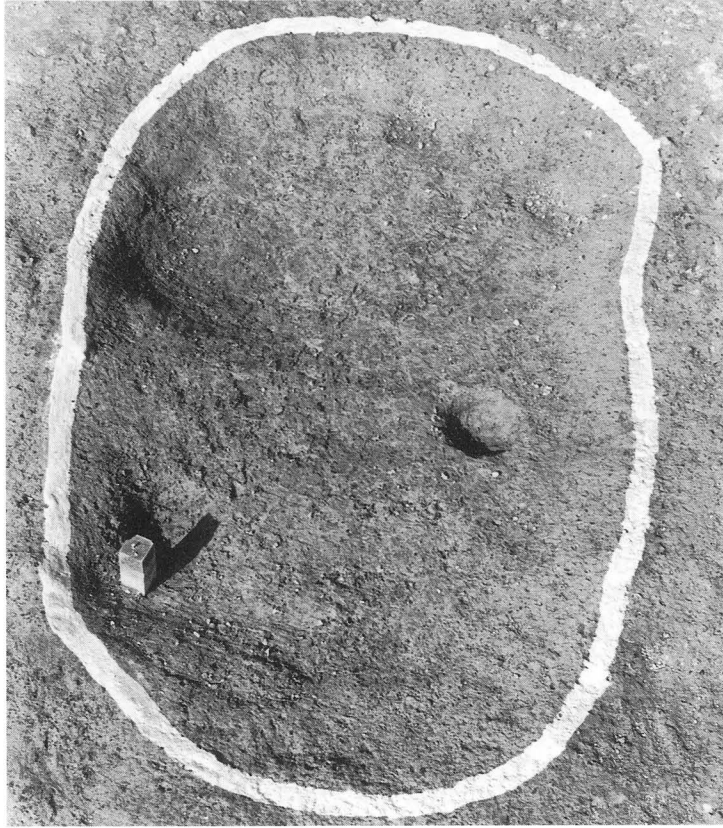
SM1008出土遺物



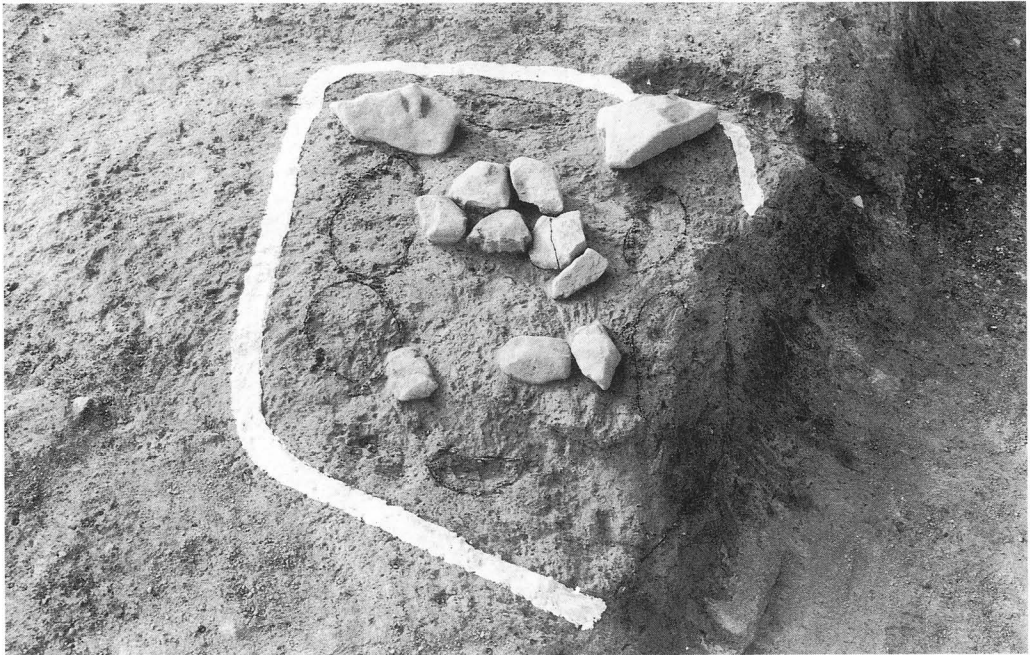
ST1004床面検出状況



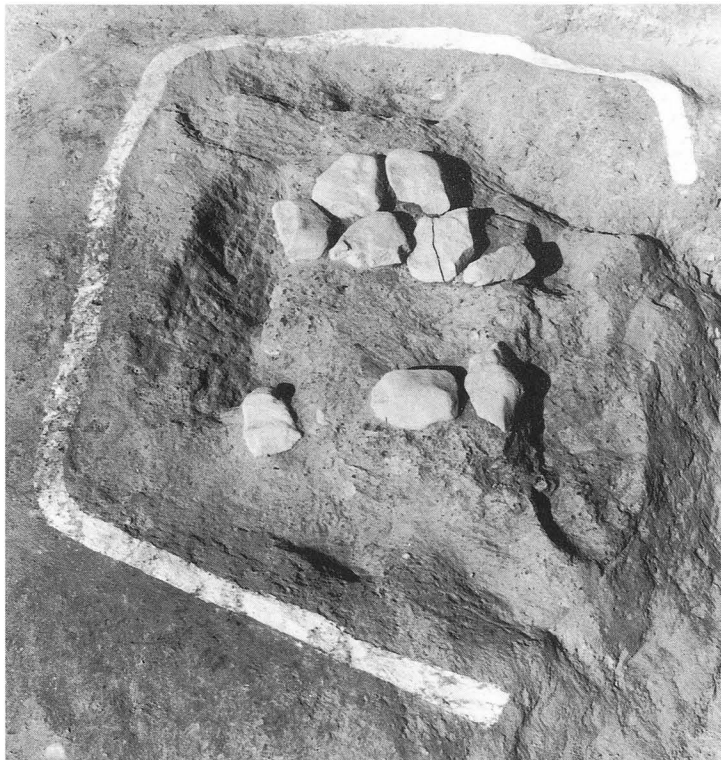
ST1004石材抜き取り穴掘削状況



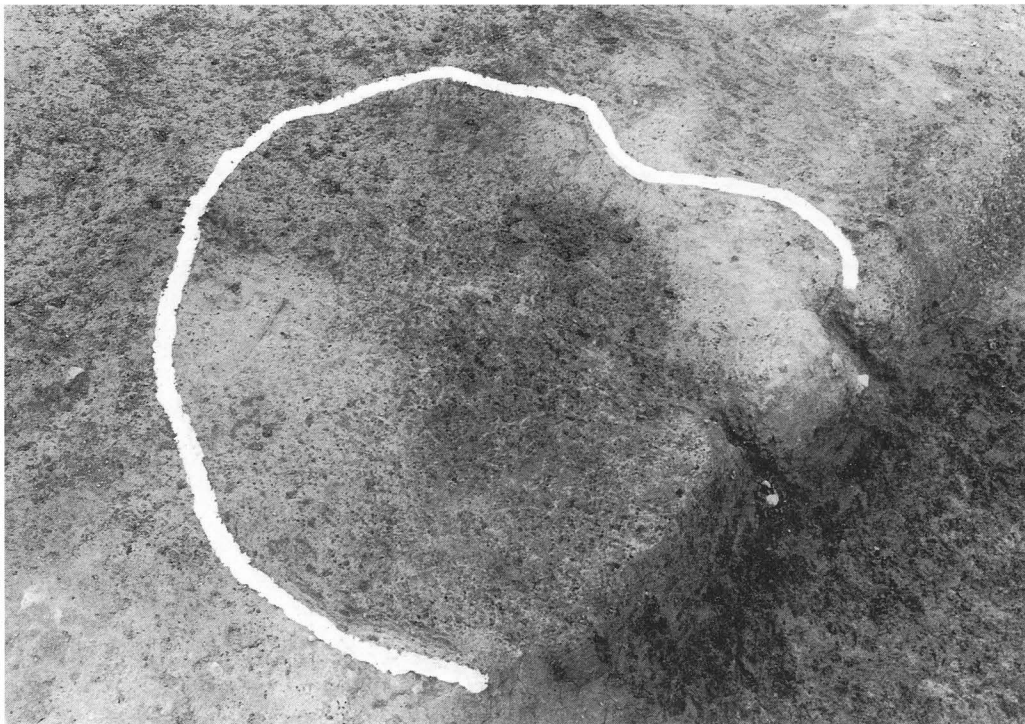
ST1004掘り方完掘状況



ST1005床面検出状況



ST1005石材抜き取り穴掘削状況



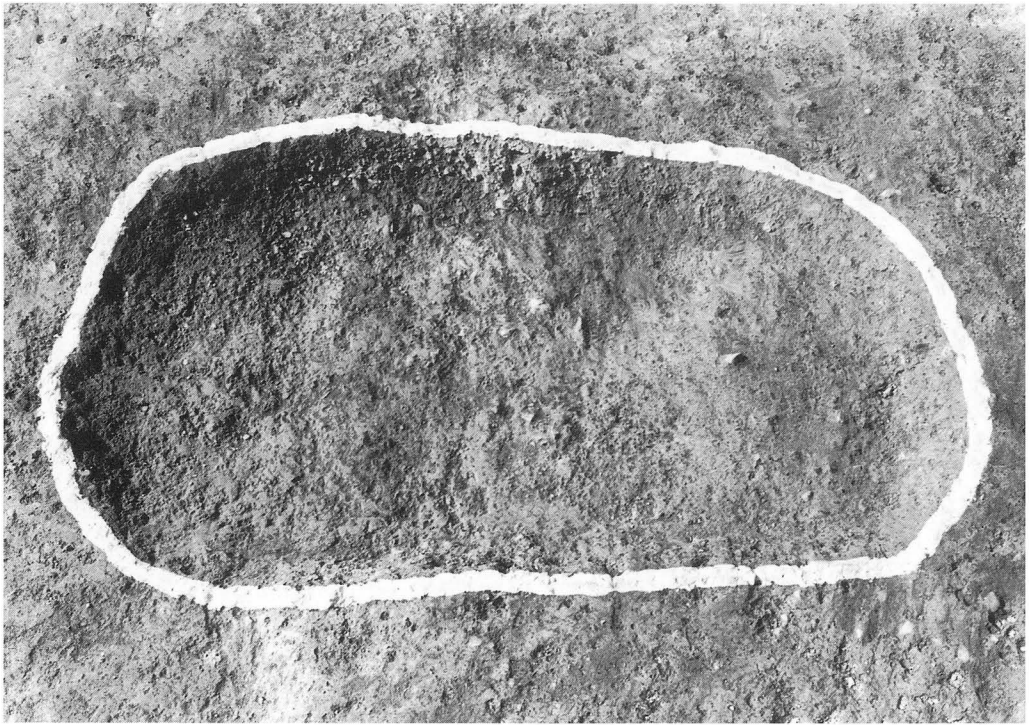
ST1005掘り方完掘状況



ST1006床面検出状況



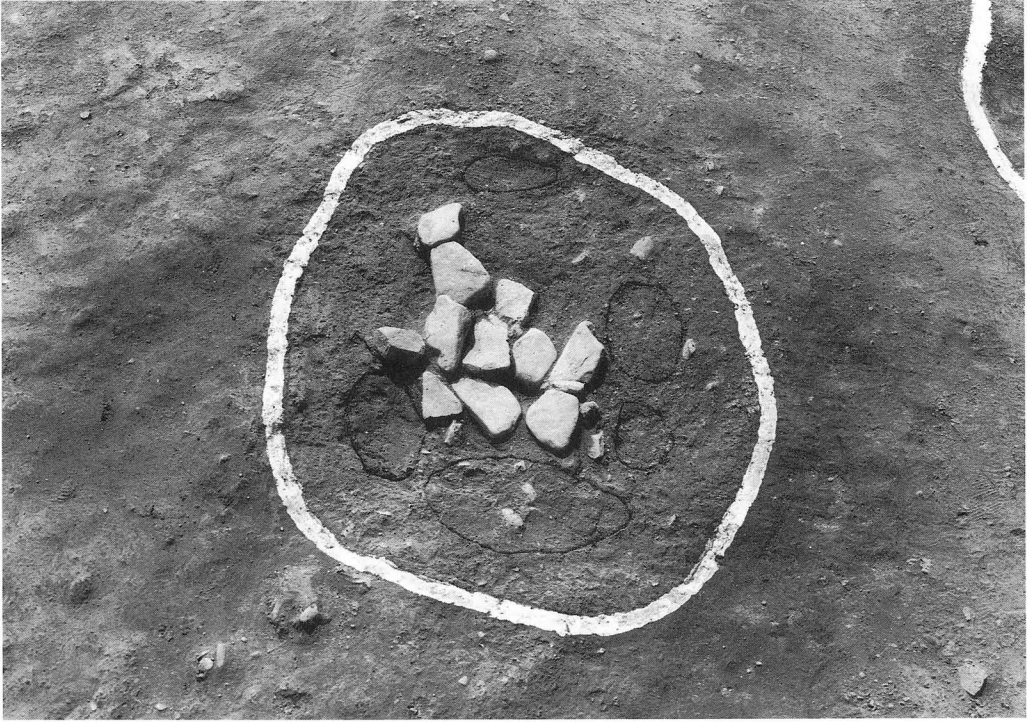
ST1006石材抜き取り穴掘削状況



ST1006掘り方完掘状況



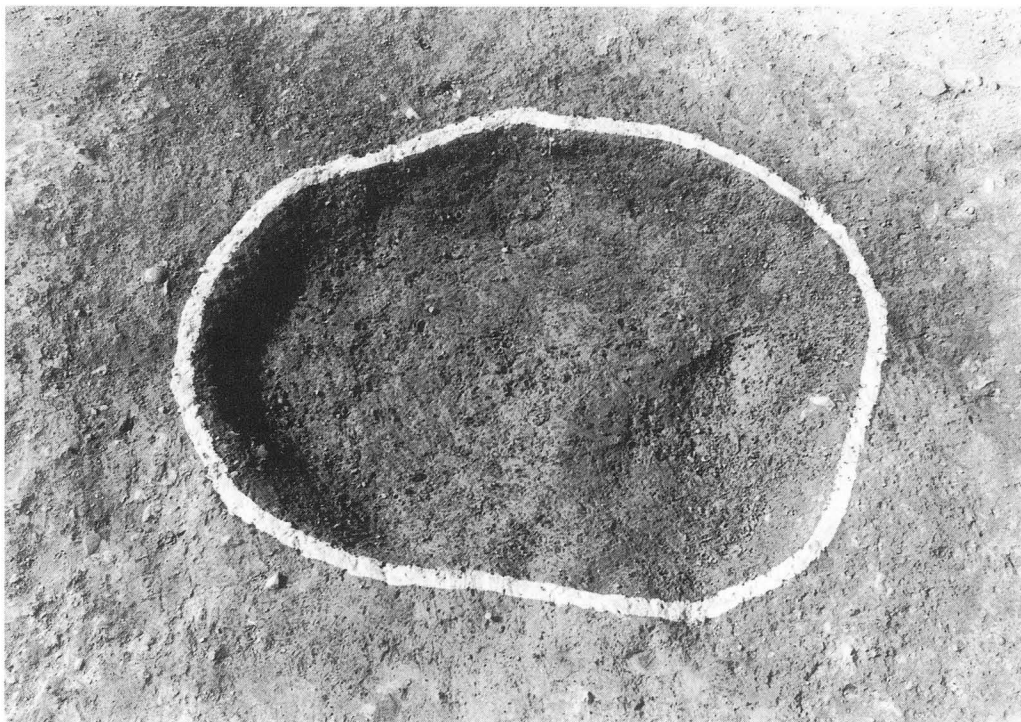
ST1007遺物出土状況



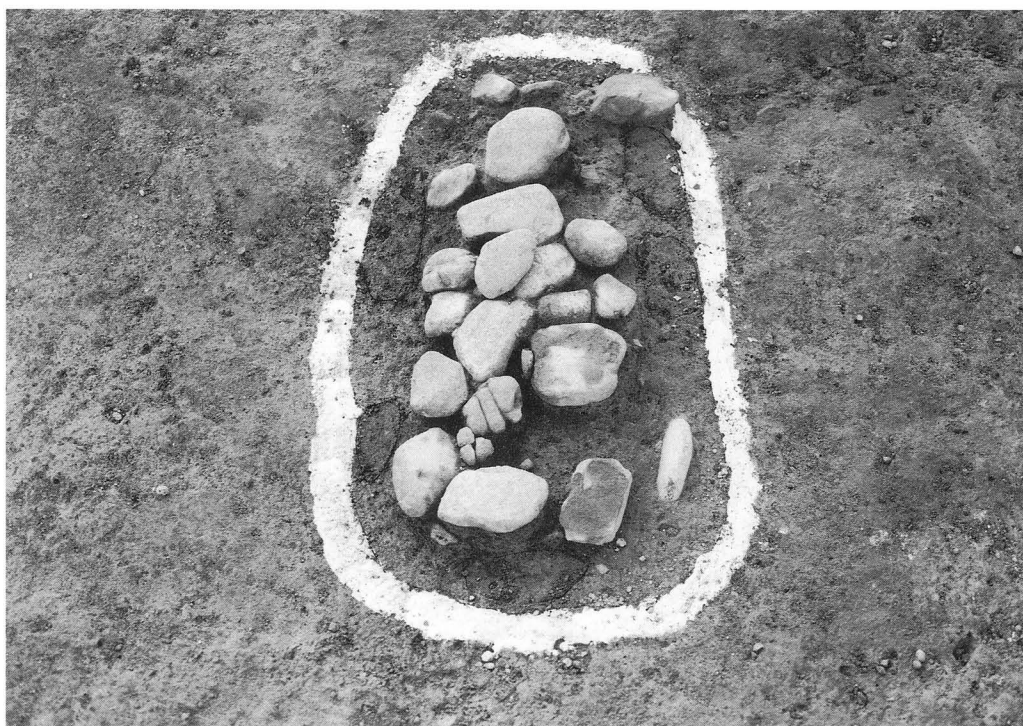
ST1007床面検出状況



ST1007石材抜き取り穴掘削状況



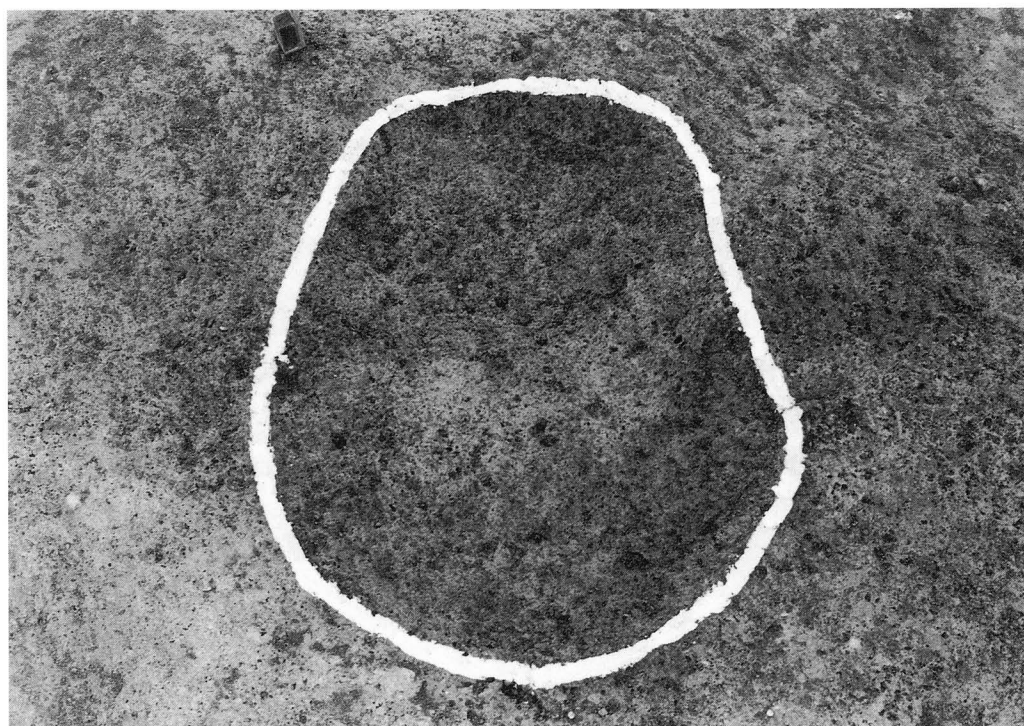
ST1007掘り方完掘状況



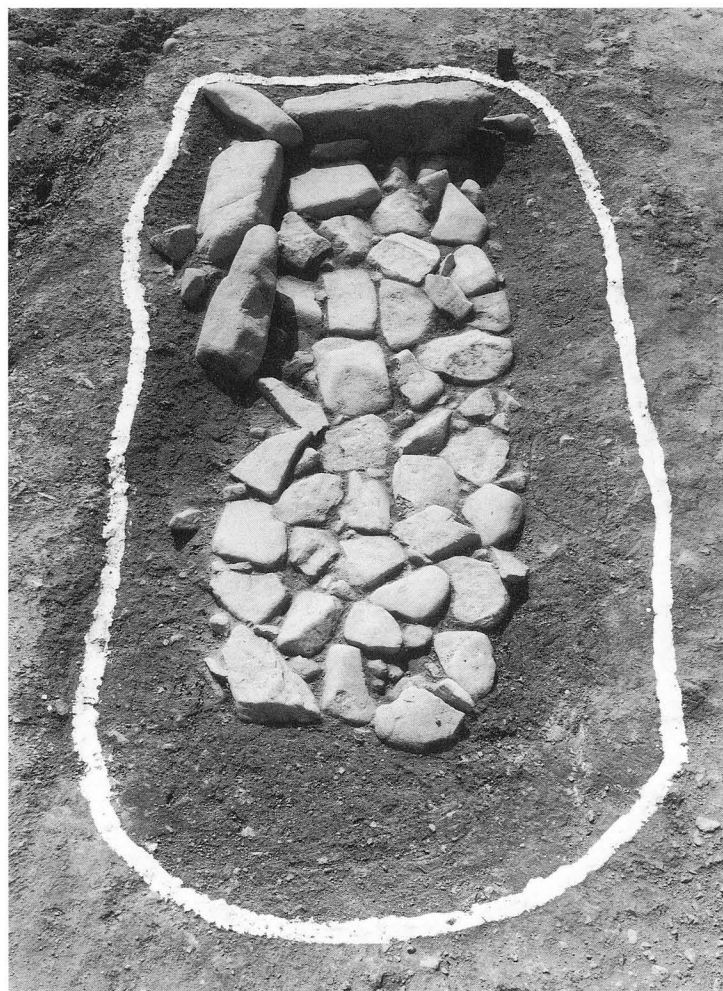
ST1008床面検出状況



ST1008石材抜き取り穴掘削状況



ST1008掘り方完掘状況



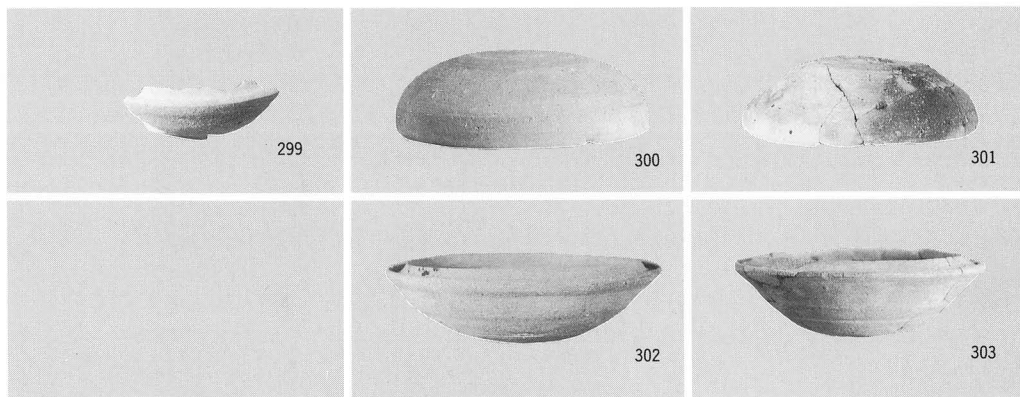
ST1009床面検出状況



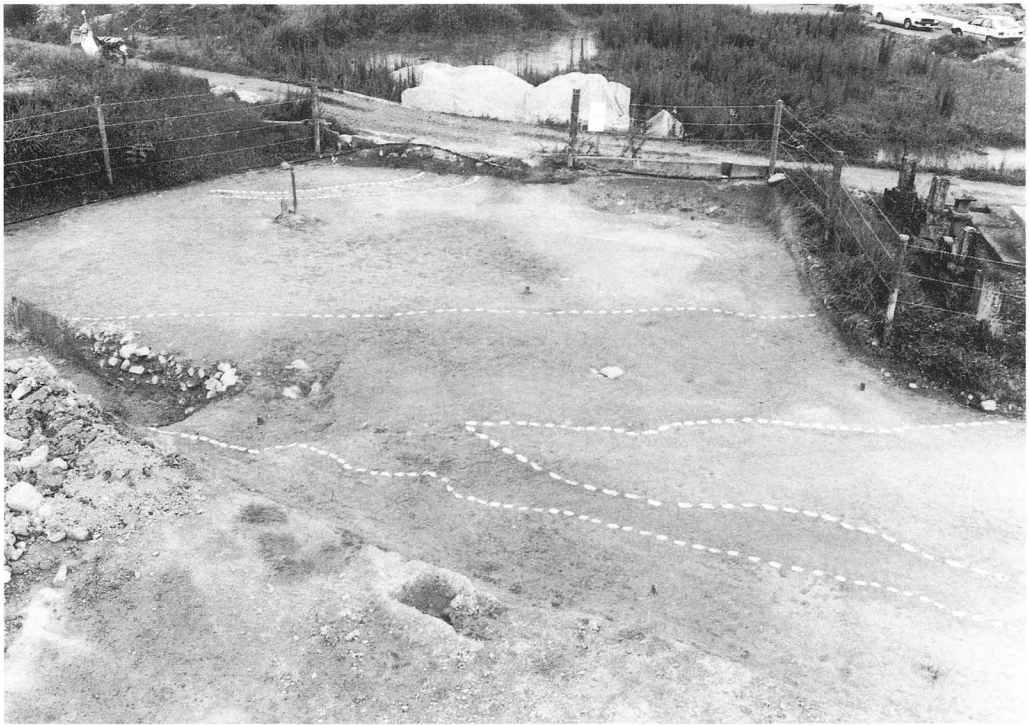
ST1009遺物出土状況



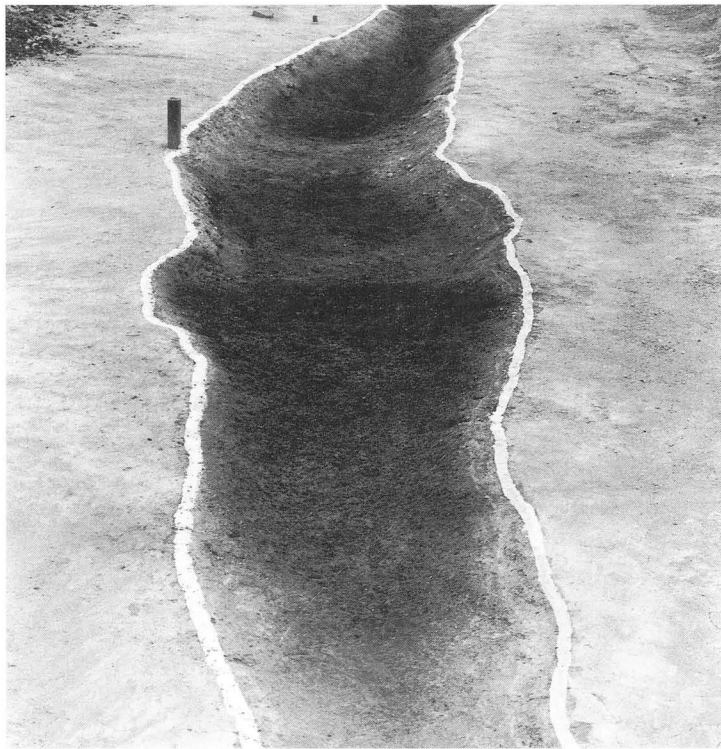
ST1009掘り方完掘状況



ST1006・7・9出土遺物



第12調査区北半自然流路



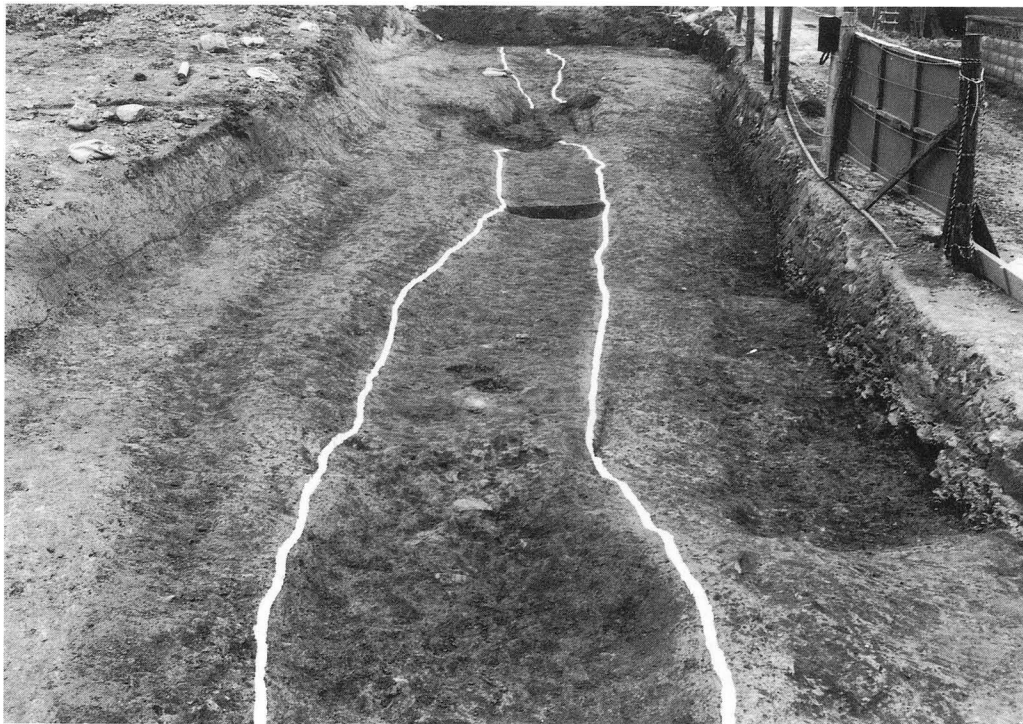
SD1004完掘状況



第12調査区SD1004堆積状況 (C - C'断面)



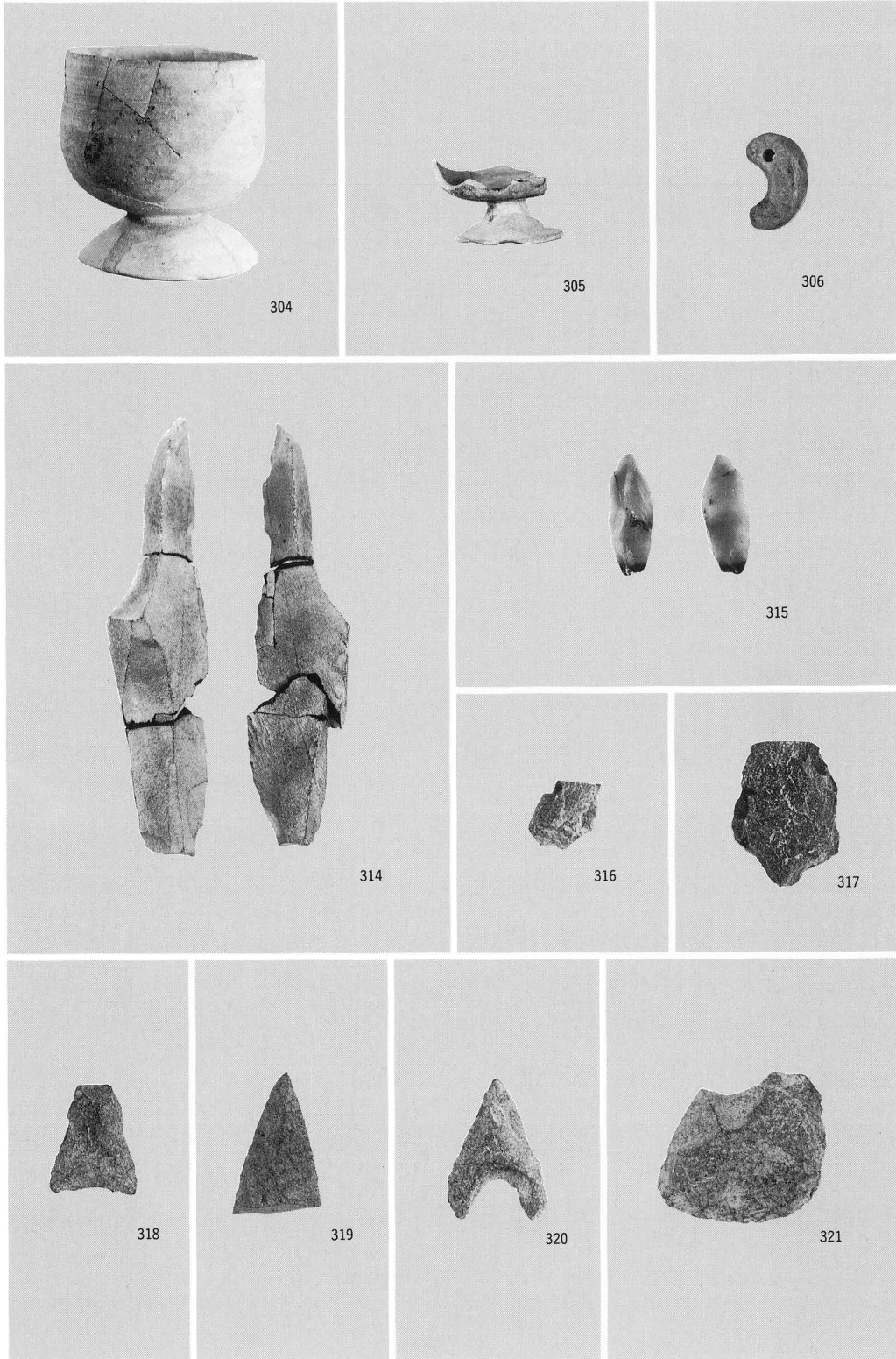
第13調査区SD1004堆積状況 (E - E'断面)



SD1005完掘状況



SD1005堆積状況



第12～第14調査区出土遺物



IV 菖蒲谷西山 B 遺跡



IV 菖蒲谷西山B遺跡

1 調査の経過

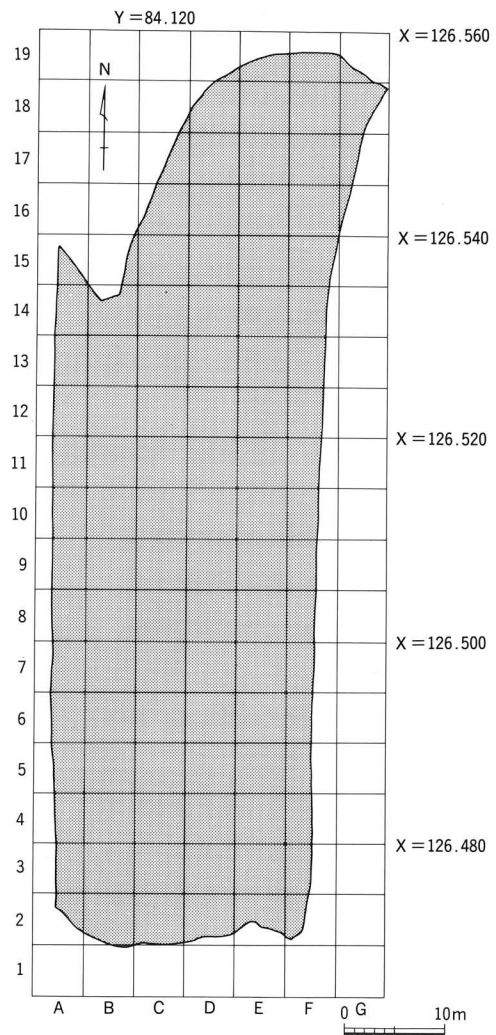
(1) 調査の経過

菖蒲谷西山B遺跡は、阿讃山脈南麓の標高約77～98mの尾根上に立地する。分布調査時には四国縦貫自動車道路線外にあり、分布調査は行われていない。分布調査によって想定された「菖蒲谷西山B遺跡」は、本報告書に記載する調査地点より南側に位置する大山谷川左岸の河岸段丘上にあり、平成3年7月8日～同年7月18日にかけて試掘調査が実施されている。その後サービスエリア建設に伴って新たに路線内に組み込まれた地点、すなわち今回調査地点に古墳群が想定されたため、徳島県教育委員会と日本道路公団による協議の結果、新たに総面積1860㎡を対象として本調査を実施することとなった。ただし実際の調査は用地買収の関係から、1610㎡を第一次調査として平成3年度に、250㎡を第二次調査として平成4年度に実施した（第2図）。

調査期間は、第一次調査が平成3年9月25日～平成4年2月29日まで、第二次調査が平成4年10月1日～11月14日までである。

(2) 調査の方法

調査を始めるにあたっては、埋蔵文化財センター発掘調査統一基準にならい、第IV系国土座標に沿って5×5mのメッシュを設定した。調査区南側より北側へアラビア数字を、西側より東側へアルファベットを配し、その組み合わせでグリッドを表現することとした



第1図 菖蒲谷西山B遺跡グリッド配置図

(第1図)。また遺構番号については、北側より順にSM1001(1号墳)、SM1002(2号墳)……とした。

(3) 調査日誌抄

第一次調査

1991年

- 10月8日 伐採作業開始。
 - 10月14日 地形測量開始。
 - 11月1日 人力掘削開始。
 - 11月7日 SM1001墳丘精査開始。
 - 11月11日 SM1001周溝掘り下げ。
 - 11月12日 SM1002墳丘検出作業開始。同周溝検出、掘り下げ。
 - 11月14日 SM1001主体部検出作業開始。SM1003墳丘検出作業開始。
 - 11月15日 SM1002主体部検出作業開始。
 - 11月19日 SM1003主体部、同周溝検出作業開始。
 - 11月26日 SM1001、SM1002床面検出作業開始。
 - 12月5日 SM1002主体部実測開始。
 - 12月11日 SM1001主体部実測開始。
 - 12月18日 SM1003主体部実測開始。
- 1992年
- 1月16日 SM1001主体部実測作業終了。
 - 1月21日 空中写真撮影。
 - 1月23日 SM1002主体部実測作業終了。
 - 2月10日 SM1003主体部実測作業終了。
 - 2月14日 SM1001、SM1002石室及び墳丘断ち割り。



写真1 遺構実測風景

- 2月18日 SM1003墳丘断ち割り。
- 2月26日 骨蔵器検出、実測、取り上げ。調査終了。

第二次調査

1992年

- 10月1日 人力掘削開始。SM1004主体部検出作業開始。
- 10月5日 SM1004羨道部及び周溝検出。
- 10月9日 SM1004墳丘精査開始。
- 10月12日 SM1004羨道部実測開始。
- 10月13日 SM1004第二次床面検出作業開始。
- 10月19日 SM1004閉塞石検出、同石室内実測開始。
- 10月20日 SM1004閉塞石実測開始。
- 10月22日 SM1004閉塞石実測終了。
- 10月26日 SM1004閉塞石除去。
- 10月27日 調査区地形測量。
- 10月30日 SM1004第二次床面礫床除去後、第一次床面検出作業開始。
- 11月5日 SM1004墳丘断ち割り開始。
- 11月9日 SM1004石室内断ち割り。
- 11月14日 作業終了。

2 調査成果

調査前の状況と遺構の配置

本遺跡の調査区は、南に延びる尾根の標高約77～98mの地点にある。調査前に行った地形測量の結果、標高94m地点、同91m地点、同88m地点、同87m地点に、合計4つの高まりを確認し、ここに古墳の存在を想定した（第3図）。

表層に堆積する腐食土直下から遺構面までの堆積は、尾根鞍部付近では表層の腐食土層の下は地山であり、堆積層はみられなかったが、裾部に下るにしたがって厚く黄褐色砂質土の堆積がみられた。また本遺跡の立地する尾根は、削平によるためか、裾に向かって急傾斜で下るといふ地形であって、遺構の想定される緩斜面はほとんどみられなかった。

遺構の配置は、調査区北側より東側斜面に外護列石や周溝を持つ1号墳、同じく東側斜面に周溝を持つ2号墳、北側に周溝を持つ3号墳、同じく北側に周溝を持つ4号墳という順に並び、また調査区南端近くの東斜面では火葬墓が検出された（第4図）。

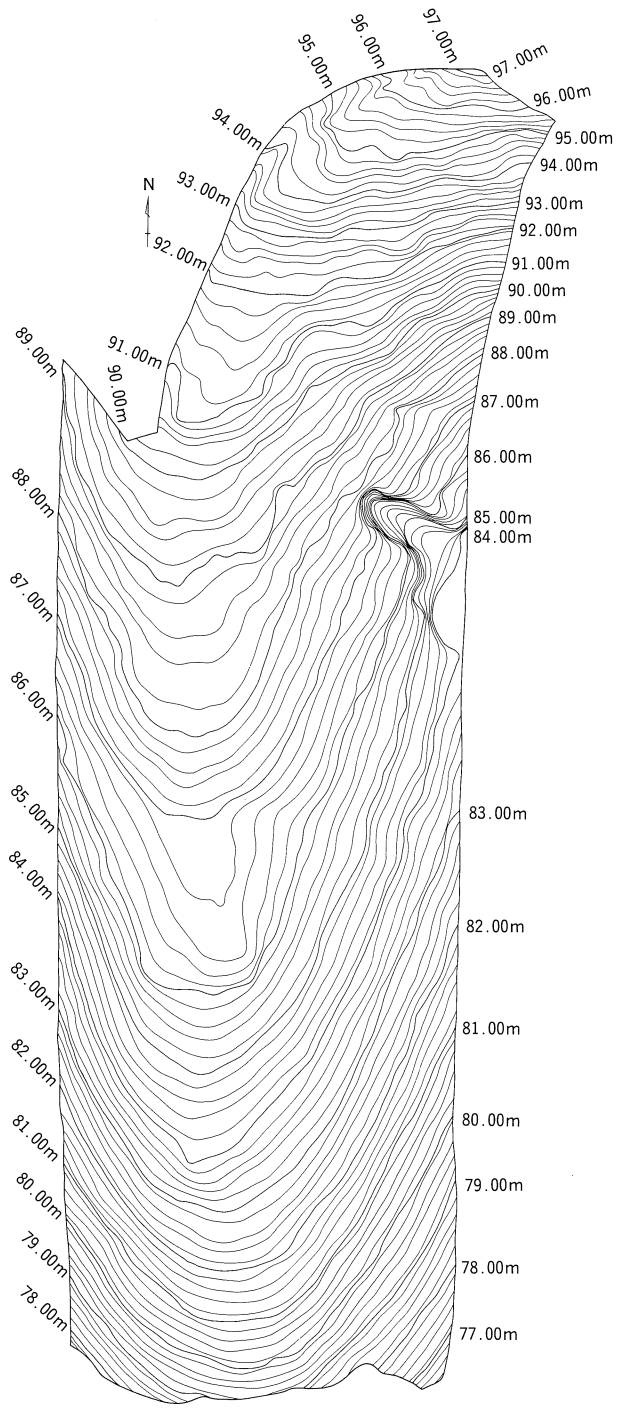
1号墳（SM1001）

(1) 墳丘・周溝

1号墳は調査区の最も北側の標高93～95mの地点に位置する。墳丘西側は調査区外にあたるが、東側斜面に周溝を、また墳丘東側には砂岩の列石を持ち、主体部には横穴式石室が構築されている（第5図）。

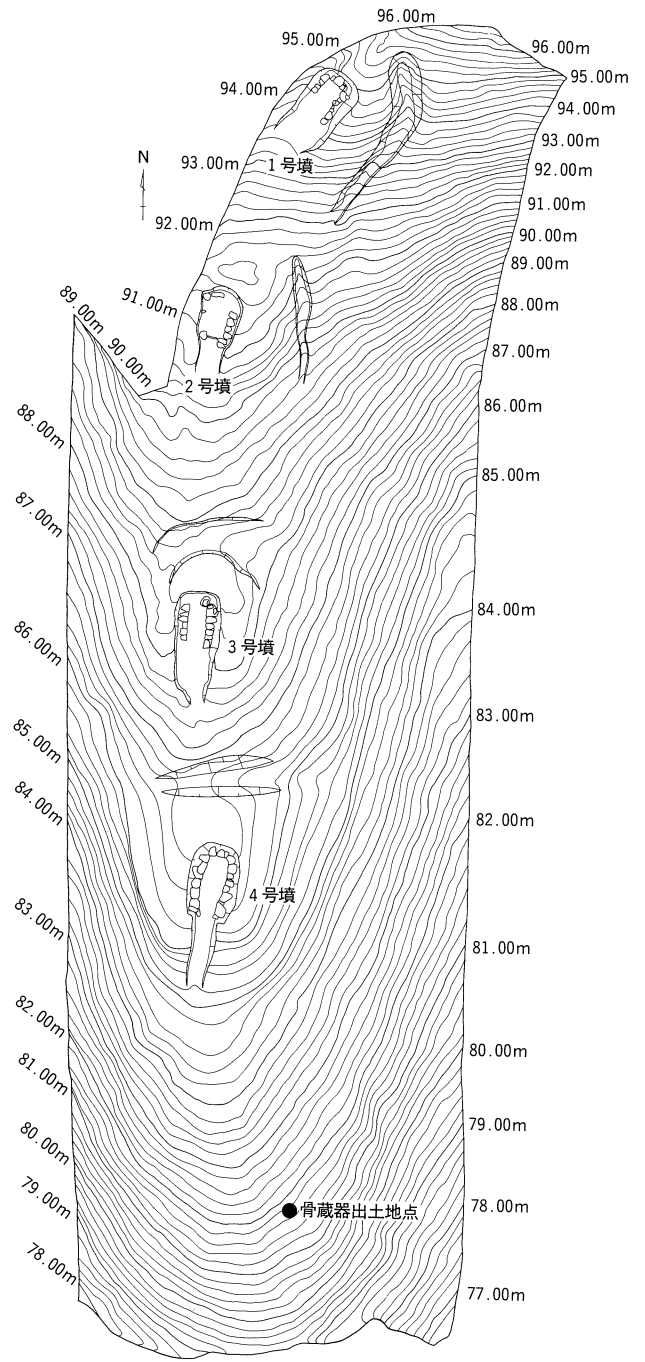
周溝は、東側斜面に長さ約12mが残存しており、中央付近の幅約1.5m、深さ約20cmで断面はU字形を呈する。周溝内には明黄褐色砂質土（14層）の堆積がみられたものの、遺物はほとんど検出されなかった。尾根鞍部については構築された痕跡が認められなかったが、当初より構築されていないものなのか、あるいは削平によって残存していないものなのかという点については明らかではない。ただ地山レベルや墳丘盛土の残存状況から考えた場合、当初より構築されていない可能性が高い。

墳丘盛土は、最も良好な部分で約45cm残存している。明黄褐色砂質土（15・17層）やにぶい黄橙色砂質土（16層）を互層に叩き締めて構築したものと思われるが、全体に粒子が粗く、しまりもあまり良好ではない。また基底部についても、2号墳や4号墳で見られるような、炭化物混じりの土を全体に薄く敷いて突き固めるという手法を採っていない（第6図）。周溝や主体部掘り方から推測される1号墳の規模及び墳形は、直径9m程度の円墳と考えら



0 10m

第3图 菖蒲谷西山B遺跡地形測量図



0 10m

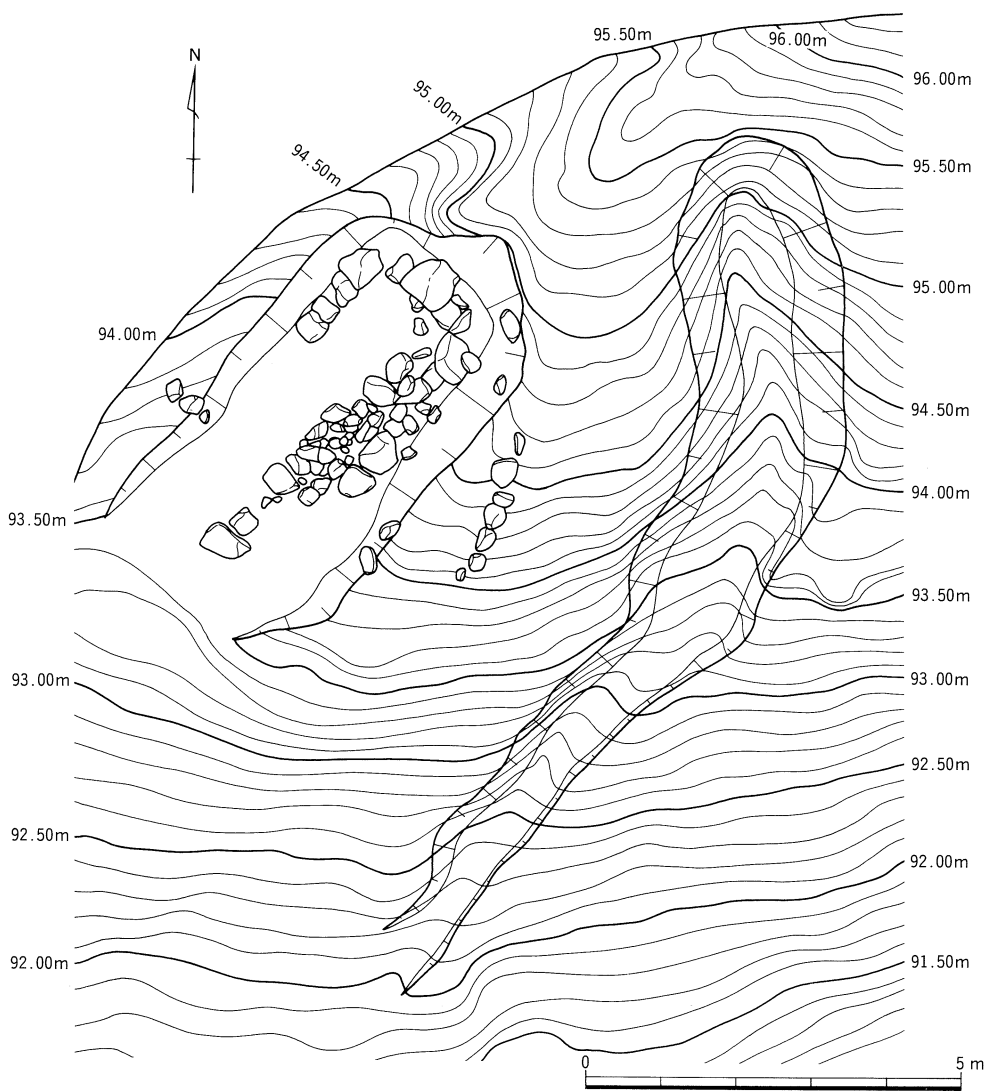
第4图 菖蒲谷西山B遺跡遺構配置図及び地形測量図

れる。

(2) 主体部

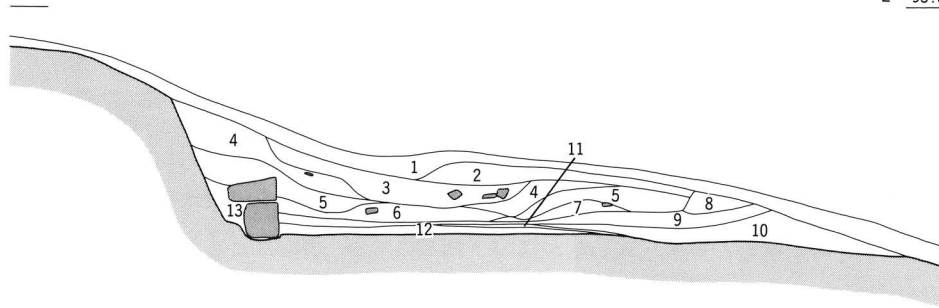
主体部は、幅約3.1m、長さ約5.7mの隅丸長方形を呈し、残存する深さは約1.4mである。そこにN44°Eに主軸をとる横穴式石室が構築されているが、盗掘によるとみられる攪乱のため残存状況は良くない（第7図）。

石室内には、黄褐色または明黄褐色の砂質土が堆積していた（2～7層）。これらの層は5～10mm程度の小礫を含み、しまりもあまりよくないことから攪乱後の堆積土とみられる。8

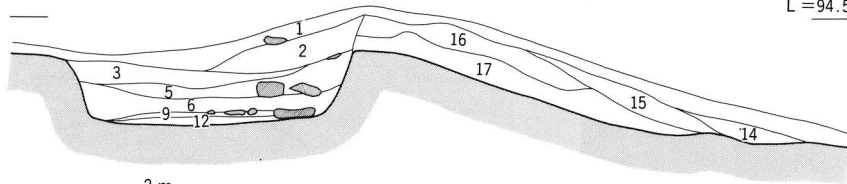


第5図 SM1001墳丘測量図

L = 95.80m



L = 94.50m



0 2 m

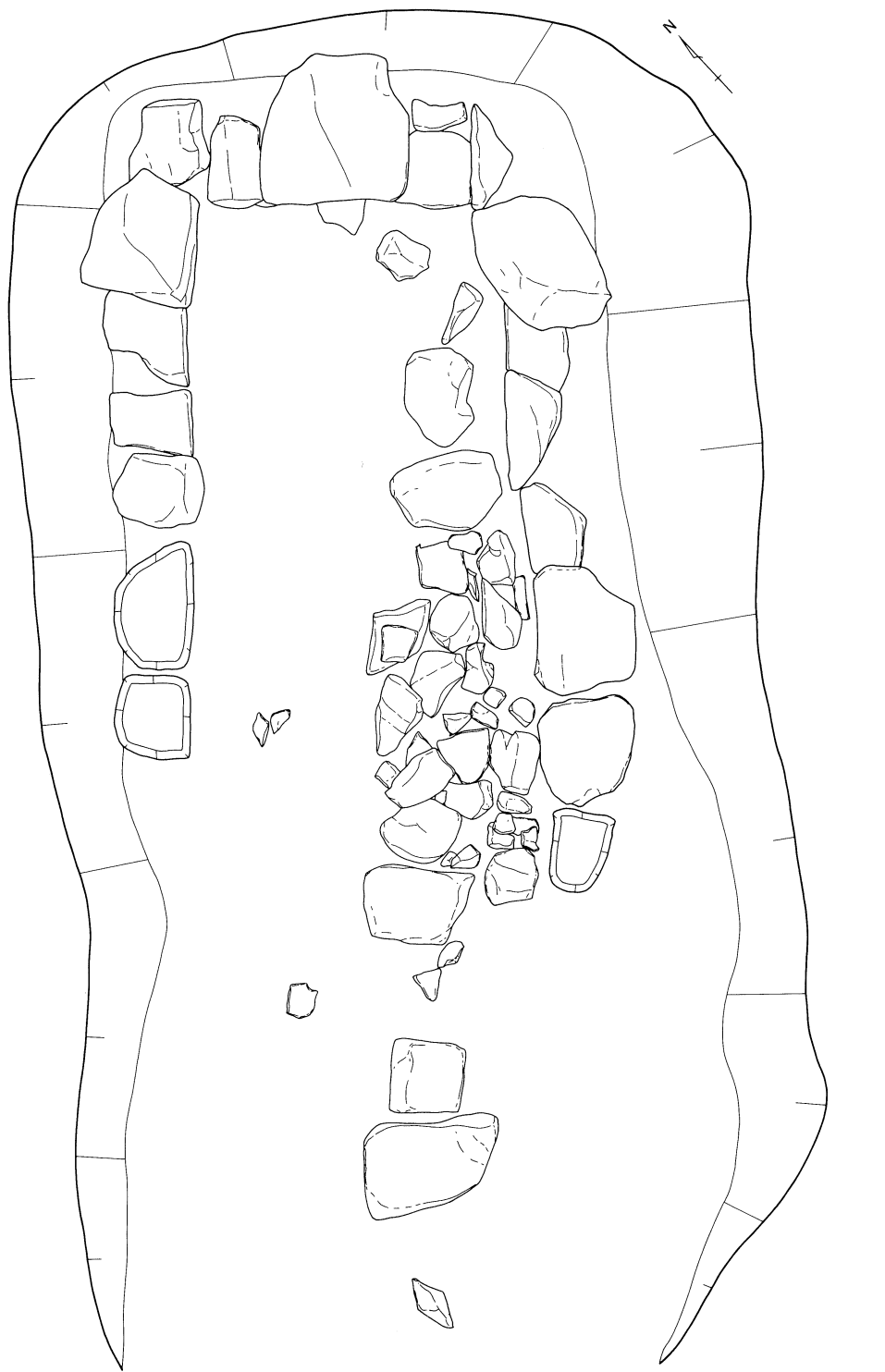
- | | | |
|------------------|-------------------|---------------------|
| 1 表土 | 7 10YR5/8黄褐色シルト | 13 10YR5/8黄褐色砂質土 |
| 2 10YR5/8黄褐色砂質土 | 8 10YR6/6明黄褐色砂質土 | 14 10YR6/8明黄褐色砂質土 |
| 3 10YR6/6明黄褐色砂質土 | 9 10YR5/6黄褐色砂質土 | 15 10YR7/6明黄褐色砂質土 |
| 4 10YR5/8黄褐色砂質土 | 10 10YR5/8黄褐色砂質土 | 16 10YR7/3にぶい黄橙色砂質土 |
| 5 10YR5/6黄褐色砂質土 | 11 10YR6/6明黄褐色シルト | 17 10YR6/6明黄褐色砂質土 |
| 6 10YR5/6黄褐色砂質土 | 12 10YR6/8明黄褐色砂質土 | |

第6図 SM1001墳丘断面図

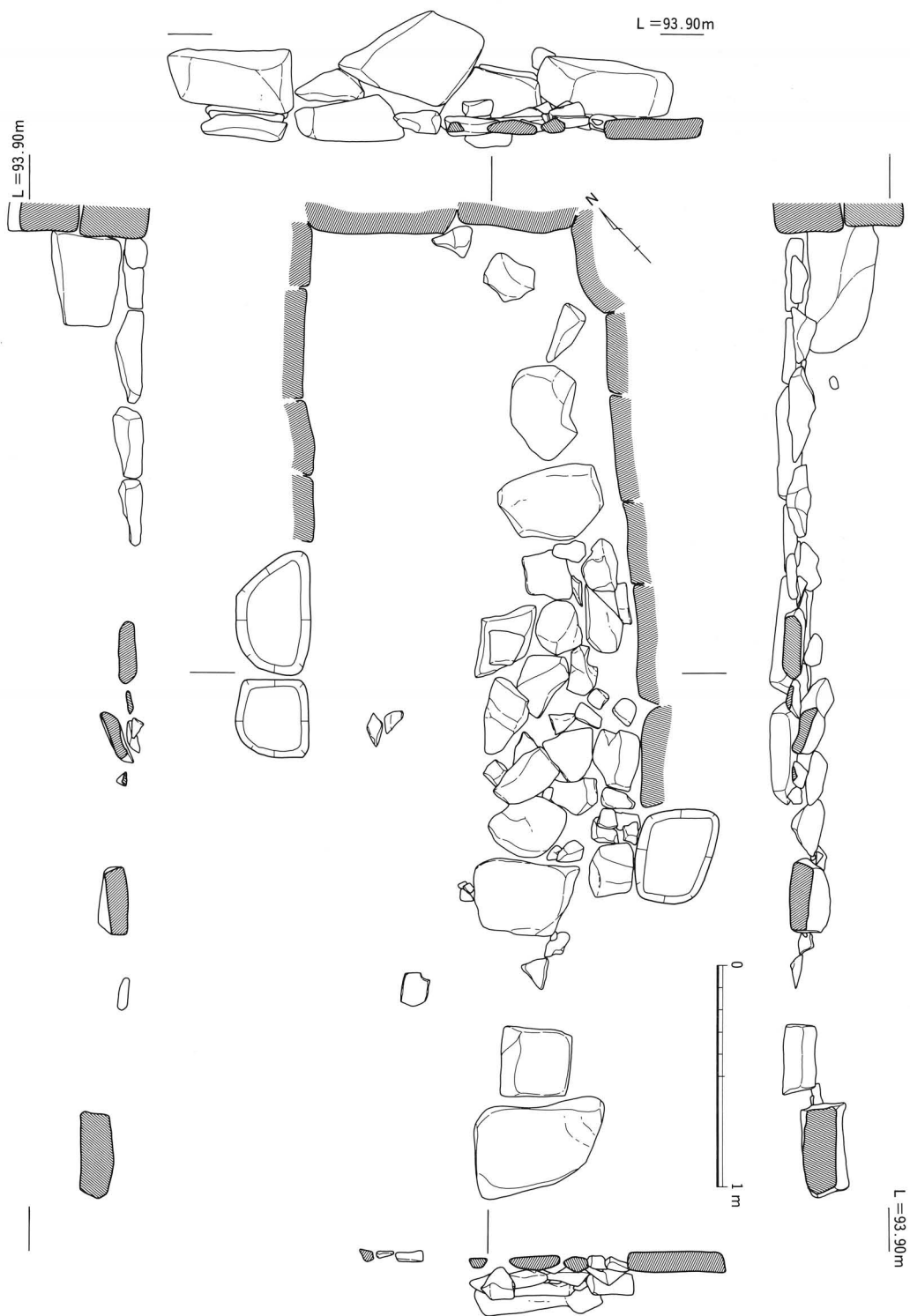
層から下位の層が攪乱以前の堆積土と考えられ、特に9～11層は床面礫床をも含み、開口部側まで延びていることから、本墳の利用終了直後の堆積と考えられる。12層は上位の層と比較しても粒子が細かく、よくしまっていることから礫床構築時の基底部として敷き詰めた層と考えられる。ただ遺構残存状況が悪いため検出状況からだけでは判断が難しいが、この12層が第一次床面であった可能も否定できない。13層は奥壁の石材を積み上げる際の裏込め土と考えられる。

石室はすべて砂岩を用いて構築されており、その内法幅は奥壁側1.2m、中央部1.35m、開口部側1.5mで、ほぼ長方形の平面プランを持つ。長さは4.3mが残存している。壁の石材は、奥壁側については1～2段、高さ約40cmが残存しているが、開口部側はそのほとんどを欠く。側壁は、基本的には第1段に30～40cm大で厚さ10cm程度の板状の石材を据え、第2段以降に40～50cm大で厚さ30cm程度の石材を配している。奥壁は2段約60cmが残存しているが、大小取り混ぜた石材を用いるなど、側壁とは異なる手法が用いられている。

床面は攪乱を受けているため、残存しているのは左側壁側約半分である(第8図)。本来は石室内全面にわたって礫床が構築されていたと考えられる。ただ石室内に敷かれた礫は様な大きさではなく、大きく4つのブロックに分けられる。まず第1ブロックは奥壁から開口部にむかって約60cm程度の部分である。礫床自体はほとんど残存していないが、20cm程度の小礫が用いられていたと考えられる。第2ブロックは奥壁から60～130cmの部分である。

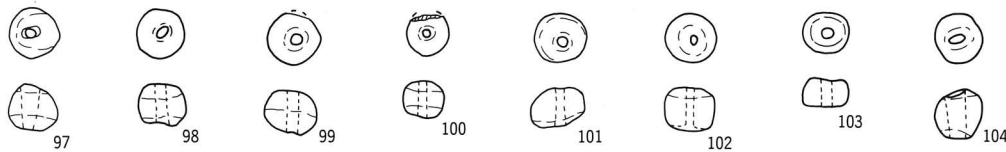
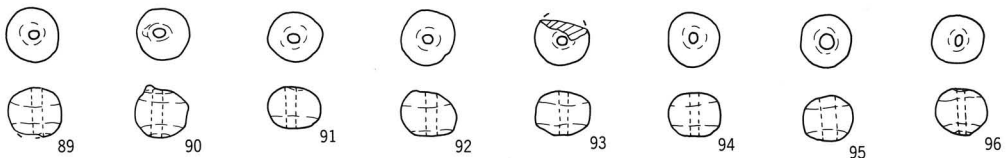
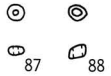
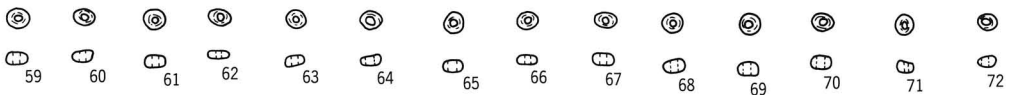
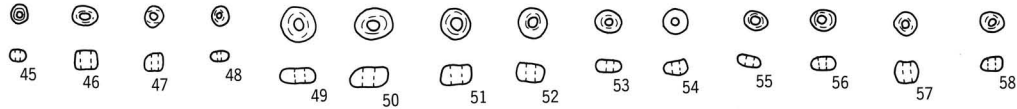
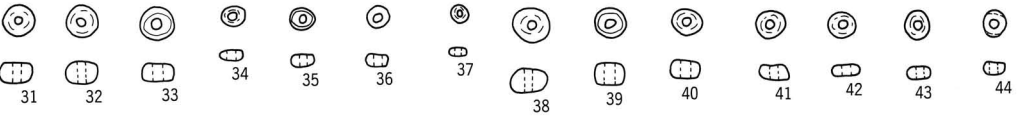
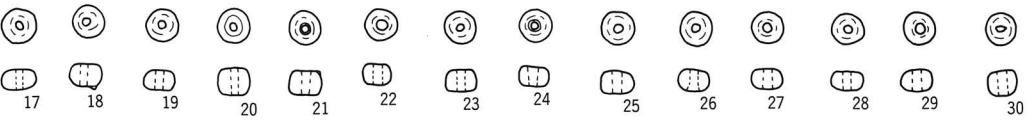
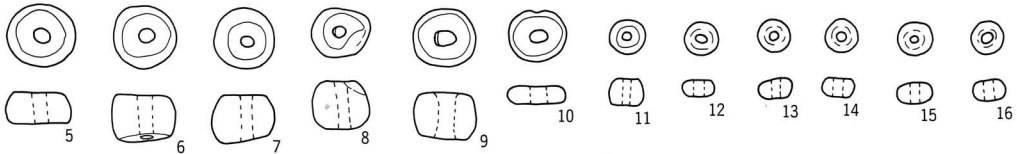
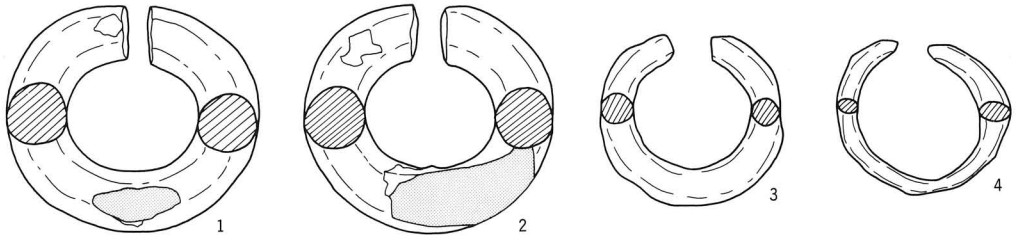


第7图 SM1001主体部平面图



L = 93.90m

第 8 图 SM1001石室实测图



第10图 SM1001出土装身具

(3) 出土遺物

1号墳出土遺物には、装身具、鉄器、須恵器がある。以下各種遺物について記述する。

装身具 (第10図)

装身具には、耳環、ガラス玉、練玉がある。

1～4は耳環で、1、2は中実の銅芯を持ち、銀張りののち鍍金を施してある。袂部で箔端部の処理の様子が観察できる。表面の鍍金も良好に残存する。3、4については銅芯のみの残存である。

5～88はガラス玉である。5～10は径6～8mm程度と最も大きい紺色の玉で、両面に研磨が施され、孔に平行な方向に気泡がみられる(A群)。また9はほぼ全面にモザイク状の細かなひびがみられ、もろい。10は5～9までと異なり、厚さが薄い。11～33は径4mm程度の紺色の玉で、ほとんどのものが孔付近のみに研磨が施されているが、20・33のように両面が研磨されているものもみられる(B群)。また18・19・21・23・27・30・31のように、切り離し時のものとみられる突起がみられるものもある。34～37は径3mm程度の紺色の玉である(C群)。38～42は径4～5mmのあさぎいろの玉で、両面が研磨されている39を除いては、孔付近のみに研磨されている(D群)。43～48は径2.5～4mmの玉で、色調は43～45がにぶあおみどり(E群)、46～48がさびあさぎ(F群)である。49は径5.10mmのこみどりの玉(G群)、50は径5.20mmのうすきの玉(H群)である。51～88は径2～4mm程度のあいいろの玉で、74の両面が研磨されているのを除けば、孔付近のみに研磨が施されている(I群)。

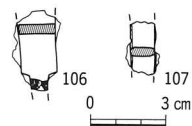
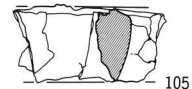
89～104は練玉である。練玉は、丸玉や白玉に近い形態のものも多くみられるが、その中間の形態を示すものもあり、厳密な形態区分は難しい。また100・103のように孔周辺の平坦面のみ黒色になっていないものは、焼成時に別の個体とくっついた状態で芯に刺されていたものを、後に切断して使用したためとみられる。

鉄器 (第11図)

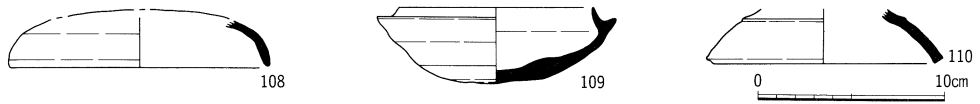
鉄器には、刀、鍬がある。

105は刀で、刀身の厚さは1.4cmを測るが、剝離がひどいため本来の厚さは不明である。

106、107は鍬である。106は厚さ4.0mmの長方形の断面形を呈することから、方頭鍬または圭頭鍬の鍬身部から茎部にかけての部位と考えられる。わずかに残存する茎部には若干木質の残存が認められる。107



第11図 SM1001出土鉄器



第12図 S M1001出土須恵器

は長頸鉢の頸部と考えられるが、残存状況が悪いため、形式は不明である。

須恵器（第12図）

須恵器には蓋杯、台付壺の脚部がある。108、109は蓋杯で、杯身109は口径10.3cm、器高4.1cmと小さく深い。約1/2が残存しており、小片の多い本墳出土遺物の中では比較的残存状況の良好な遺物である。

(4) 小結

本墳は、長方形に近い石室平面プランを持ち、副葬品に刀を持つことが特徴として挙げられるが、床面直上まで攪乱を受けており、床面の礫床も西側半分を欠く。そのため棺配置や追葬回数を厳密に検討することは難しい。追葬については、耳環が2組検出されていることで、一度は追葬が行われた可能性が考えられる。これは遺物の出土状況において、奥壁側の1群が他の1群に比べてレベルが低く、礫床の下のレベルから出土していることとも関わりがあり、礫床下の12層明黄褐色砂質土が第一次床面として捉えられるかどうかという問題とも密接に絡み合っている。

2号墳（S M1002）

(1) 墳丘・周溝

2号墳は、1号墳の南の標高90.5～91.5mの地点に位置する。墳丘西側は大半が調査区外にあたるが、東側斜面には周溝を持ち、掘り方の周囲に砂岩の列石がみられる。主体部には横穴式石室が構築されている（第13図）。

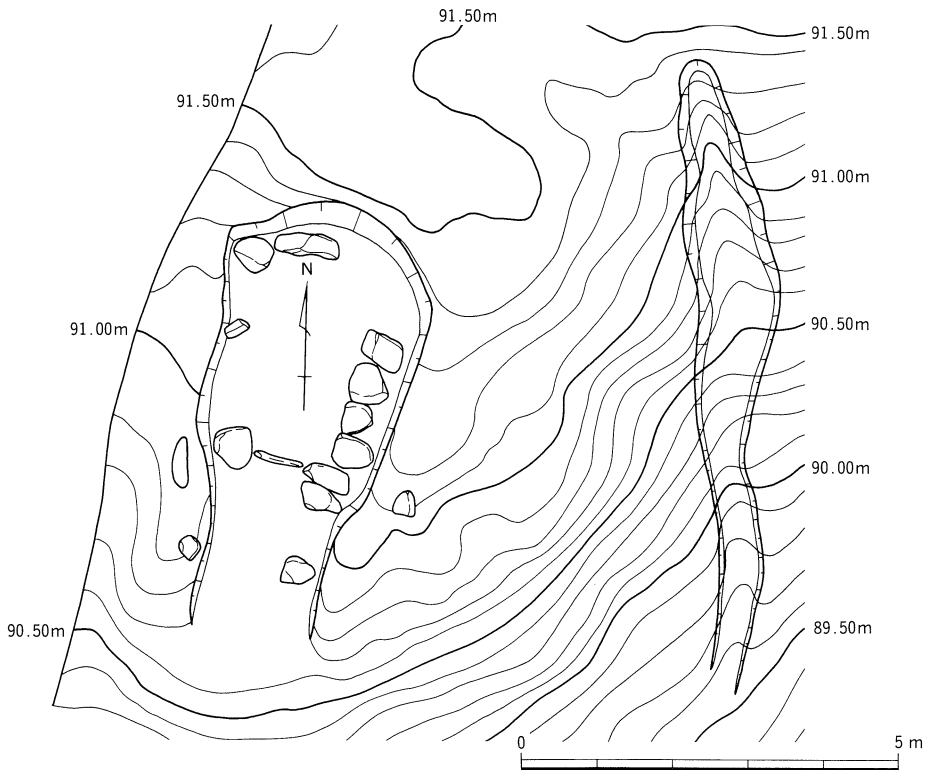
周溝は、長さ8mほどが残存し、南北方向にほぼ直線状に構築されている。幅は約80cm、深さは約20cmで、断面はU字形を呈する。砂質土の堆積がみられたが、遺物は少なかった。尾根鞍部には痕跡は認められないが、地山レベルや盛土の残存状況から、当初より構築されていたものと考えられる。

墳丘は残存している部分から、①地山面を露出させ、表面の凹凸に対して明黄褐色シルト

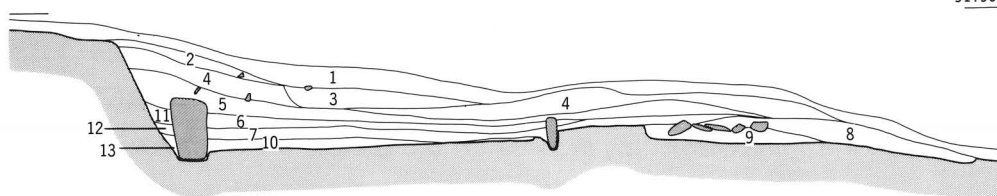
(24層) もしくは明黄褐色砂質土 (25・26層) を施し、レベル調整を行う。②その上面に炭化物混じりの褐灰色シルト (23層) を薄く敷き、突き固めて基底部を構築する。③さらに明黄褐色シルト (17層) やにぶい黄橙色砂質土 (19層) などを互層に叩き締める。という方法で構築されており、石室の掘り方はその後掘削されている(第14図)。しかし、墳丘南側のように地山面のレベルが低い部分では、盛土が厚くなることを想定しているためか、炭化物混じりのシルトを薄く突き固めるという工程を3度行っている。また盛土は、墳丘中央付近では約30cm程度残存しているが、北側の地山のレベルの高い部分ではほとんど残存しておらず、反対に南側では約45cm残存している。また石室の掘り方も北側では地山を深く掘り込んでいるのに対し、南側では盛土でレベルを上げた上で掘り方を掘削している。周溝や主体部掘り方から推測される2号墳の墳形及び規模は、直径10m程度の円墳と考えられる。

(2) 主体部

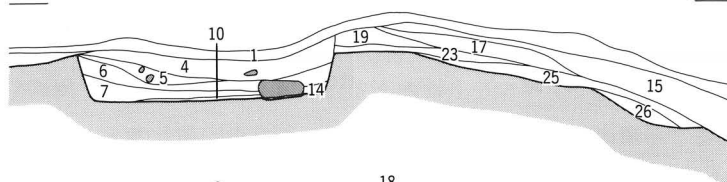
主体部は、幅約2.8m、長さ約5.8m、残存する深さ約1.2mの隅丸長方形の掘り方に、主軸をN13.5°Eにとる横穴式石室が構築されている(第15図)。盗掘とみられる攪乱のために残存



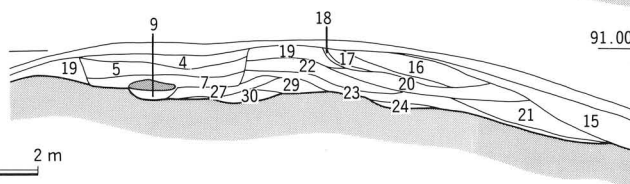
第13図 S M1002墳丘測量図



91.50m



91.00m



0 2 m

- | | | |
|----------------------|---------------------|-------------------|
| 1 表土 | 11 2.5 Y 6/6明黄褐色砂質土 | 21 10YR6/8明黄褐色シルト |
| 2 10YR6/8明黄褐色砂質土 | 12 2.5 Y 6/8明黄褐色砂質土 | 22 10YR6/6明黄褐色シルト |
| 3 10YR6/6明黄褐色シルト | 13 2.5 Y 7/6明黄褐色砂質土 | 23 10YR4/1褐灰色シルト |
| 4 10YR6/6明黄褐色砂質土 | 14 2.5 Y 7/6明黄褐色砂質土 | 24 10YR6/6明黄褐色シルト |
| 5 10YR6/8明黄褐色砂質土 | 15 10YR7/6明黄褐色シルト | 25 10YR6/6明黄褐色砂質土 |
| 6 10YR7/6明黄褐色シルト | 16 10YR7/4にふい黄橙色シルト | 26 10YR6/8明黄褐色砂質土 |
| 7 10YR6/6明黄褐色砂質土 | 17 10YR6/6明黄褐色シルト | 27 10YR6/6明黄褐色シルト |
| 8 10YR7/6明黄褐色シルト | 18 10YR4/2灰黄褐色シルト | 28 10YR4/2灰黄褐色シルト |
| 9 10YR7/6明黄褐色砂質土 | 19 10YR7/4にふい黄橙色砂質土 | 29 10YR7/6明黄褐色シルト |
| 10 2.5 Y 6/4にふい黄色粘質土 | 20 10YR6/6明黄褐色砂質土 | 30 10YR7/6明黄褐色砂質土 |

第14図 S M1002境丘断面図

状況は良くない。

石室内には、明黄褐色の砂質土（2・4・5・7層）やシルト（3・6・8層）が堆積していたが、これらの層は攪乱後の堆積層と考えられる。10層のにふい黄色粘質土は、粘性も強く、しまりも良好であり、床面もしくは床面構築時の基底部をなすものとみられる。また11～14層の明黄褐色砂質土は、壁体構築時の裏込め土とみられる。

羨道部は、掘り方の幅約1.5m、長さ約1.8mで、残存する石材より推定される羨道内法幅は約80cmである。壁の石材は、左側に40cm大のものが2つ残存しており、主軸方向に直線状に延びていたことが窺える。また羨道部には床面に排水溝が構築されている。排水溝は幅40cm、残存長約2.2m、深さ20cmで、U字形の断面形を呈する。上面には30～40cm大で厚さ10cm程度の石材が蓋として架構されており、排水構内には明黄褐色砂質土（9層）の堆積がみられた。

玄門部は2つの50～60cm大の袖石と、床面に立てて配置された長さ約70cm、幅約40cm、厚さ10cmの板石を仕切石として用いることで構成されている。しかし、1段しか残存していな

いことや、側壁の残存状況が悪いことから、袖部は左片袖式の可能性を全く否定することはできないものの、両袖式の可能性が高い。

側壁は、40～60cm大の砂岩のやや角ばった石材を第1段に配している。右側壁のほとんどと左側壁の奥壁側を欠くため、玄室平面形の明確な形状は明らかにし難いが、長方形に近いものと推測される。奥壁は60～100cm大で厚さ30cmの砂岩の板石を立てて使用している。玄室床面は、検出段階においては、10～20cm大の砂岩礫が一面にみられたが、その検出状況より、盗掘とみられる攪乱によって礫床が攪乱されたものとする。

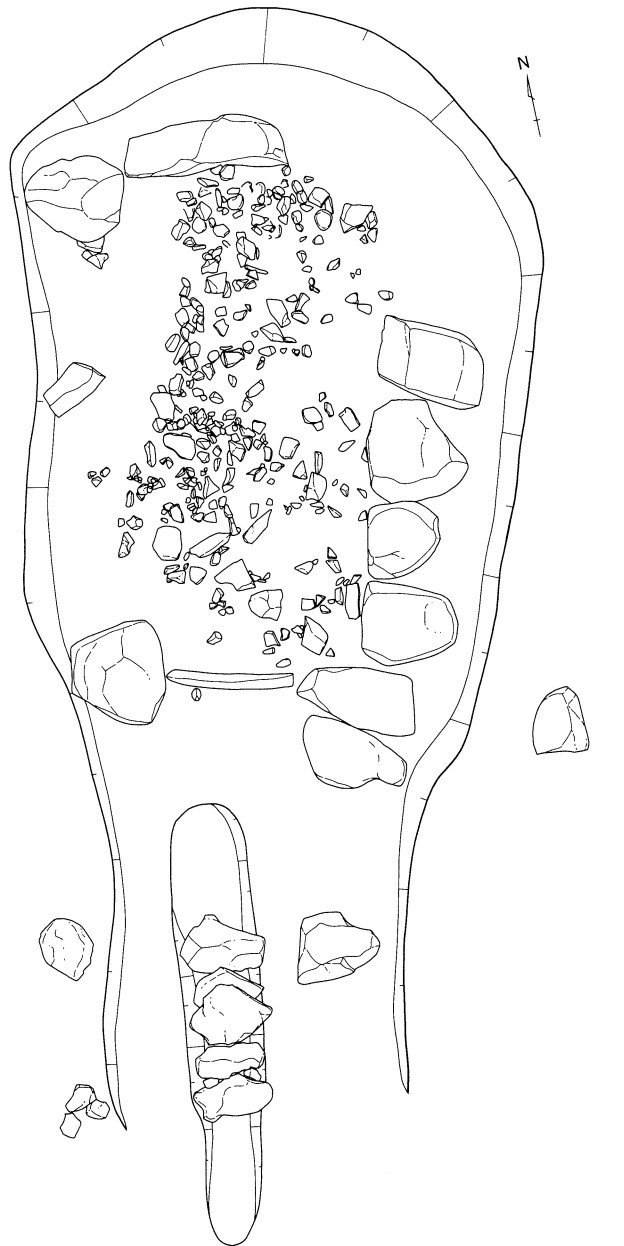
遺物は、すべて玄室内から検出されたが、大半は攪乱時に外部へ持ち出され、残存ものはほとんどが破片である。ガラス玉は奥壁付近で、須恵器や鉄器は玄室中央から玄門にかけての地点から検出された。

(3) 出土遺物

2号墳出土遺物には、装身具、鉄器、須恵器がある。以下各種遺物について記述する。

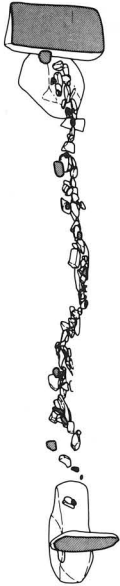
装身具 (第18図)

111～140はガラス玉である。



第15図 S M1002主体部平面図

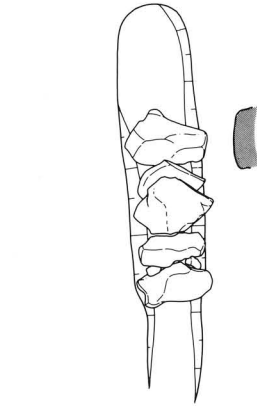
L = 91.25m



L = 91.25m



L = 91.25m

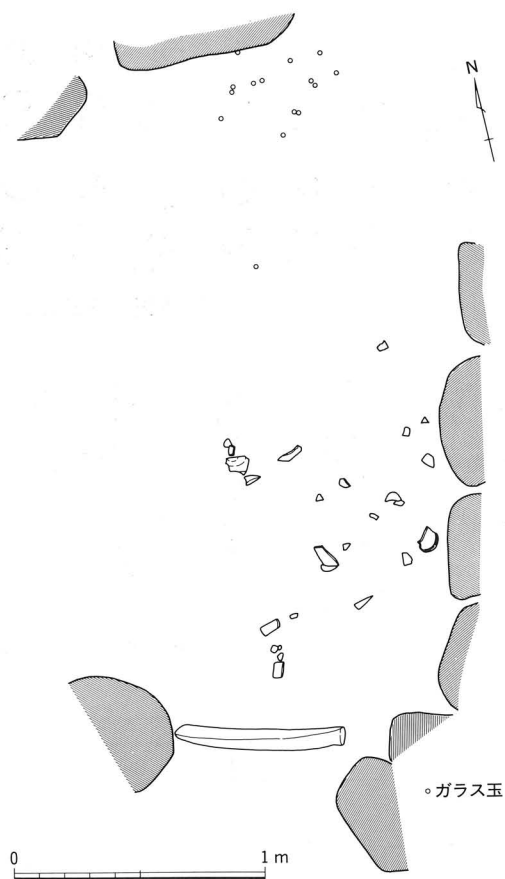


L = 91.25m

0 1 m

第16图 SM1002石室実测图

111 (A群)・112 (B群) は4.5mm程度の径を有するダービーブルーの玉で、上下両面は研磨され、2mm前後と大きめの孔を持つ。また112は孔に平行な方向に気泡がみられる。113～115は紺系統の色調の玉で、両面に研磨が施されている(C群)。116～129はさびあさぎの玉で、ほとんどは孔付近のみに研磨が施されているが、117・119・126は上下両面を研磨してある(D群)。130～132は不透明なわさびいろの玉で、130・132は両面に研磨が施されているが、131は巻き付け法で製作されたとみられ、側面の一部が薄くなっている(E群)。133・134は透明感のあるなんどいろの玉で、133には孔と平行な方向に気泡がみられる(F群)。135～137は透明感のあるあさぎいろの玉(G群)、138～140はあいいろの玉である(H群)。



第17図 S M1002石室内遺物出土状況

鉄器 (第19図)

鉄器には、鍬、刀子、刀装具、鎌がある。

141～147は鍬である。141はやや浅い逆刺を持つ腸袂三角形鍬である。142は鍬身関部が直角関を呈する三角形鍬である。鍬身部先端から中位にかけての刃部を欠くが、鍬の付着の様子から、副葬された当初から欠けていた可能性も考えられる。143は方頭鍬である。刃部付近のみが残存している。144は平根鍬の篋被部から茎部と考えられる。145・146は長頸鍬の篋被部、147は茎部とみられる。

148は刀子である。やや大形で、良好に鍬が残存しているが、茎部を欠き、木質等の残存は認められない。

150・151は曲刃鎌で、150は折り返し部と刃部先端を欠き、151は刃部先端のみ残存しているが、両者は同一個体である可能性も考えられる。

須恵器 (第20図)